

時いよく叱り給ひて。三千三百三十三度の拜をせよと仰せられければ。孝道本よりすくよかなる者にて侍る上よ。唯今もの能く食ひて。力もありておぼえけるまゝに。いとやすくとしはてにけり。其時入道殿頭がきをせさせ給ひて。やすからぬものかな。法師は死なばやと仰せられたりけるに。上臈しかりける御勘當なりかし。此飯菜をうとましき事に思し召しとりたる事は。御遠行の時しろしめしたりけるとかや。さなくては誠にいかでさる物ありともしろしめすべき。

○
いづれのことにか。山僧おまたともなひて。兒なと具して竹生島へ参りたりけり。巡禮はて。今は歸りなんとしける時。兒どもいふやう。この島の僧たちは水練を業としておもしろき事にて侍るなり。いかゞして見るべきといひければ。住僧の中へ使をやりて。少人た

ちの所望かく候ふ。いかゞ候ふべきといひやりたりければ。住僧の返事に。いと易き事にて候ふを。さやうの事仕うまつる若者只今たがひ候ひて。一人も候はず。返すく口をしき事なりといひたりければ。力及ばでおのゝかへりけり。舟にのりて二三町ばかり漕ぎ出でたりける程に。張衣のあざやかなるに。長絹の五帖の袈裟のひだあたらしきかけたる老僧。七十餘にやあるらんと見ゆる一人。脛をかきあげて海の面をさし歩みて來るあり。舟をどめてふしぎの事かなと目をすまして見居たる所よ。近く歩みよりていふやう。辱く少人たちの御使をたまひて候ふを。りふし若者どもみなたがひ候ひて。御所望空しく御歸り候ひぬる。生涯の遺恨にさぶらふよし。老僧の中より申せと候ふなりといひて。かへりにけり。是に過ぎたる水練の見物あるべきやと目をおどろかしたりけり。

阿佛尼　大納言爲家の室。中納言爲相の母なり。始め順徳天皇の皇后安嘉門院の官女となりて、四條と呼ばれし歌よみは是なり。後剃髮して阿佛尼といふ。世に北林禪尼と呼べり。

爲家の祖父俊成以來、播州には細川庄、江州には小野庄を和歌所の地行所として世襲し來りしが、爲家は之を嫡子の爲氏に傳へんとしたれど、不孝あまた續きしかば、遂に二男の爲相に譲らんと決心し、養育を實母の阿佛尼に託し、生長を待ち居たるに爲家の没後、爲氏は其幼少なるを侮りて播州の地行所を押領せり。阿佛尼は是が訴訟を携へて女ながらも旅立し、建治三年十月鎌倉に下りぬ。此時の記行を十六夜日記と云ふ。和歌の道を重んずる心の深きと、子を思ふ情の溢れたるとは、此旅行と此記行とを成したるなり。阿佛尼は勝訴となりしが、歸京せずして没せり。十六夜日記の外に阿佛口傳、乳母の文、夜鶴抄などの著あり。

十六夜日記の内

惜しからぬ身ひとつの安く思ひ捨つれども、子を思ふ心の闇は猶忍びがたく、道を願ふる恨はやらんかたなく。さてもなほあづまの龜の鏡にうつさば曇らぬかげもや顯はるゝと。せめて思ひあまりて萬のはかりを忘れ、身をぬうなき者になしはて、ゆくりもなぐいさよふ月に誘はれ出で、なんぞ思ひなりぬる。さりどて文屋の康秀がさそふにもあらず、住むべき國もどむるにもあらず。頭はみふゆ立つ始めのさだめなき空なれば、ふりみふらすみ時雨もたぬす。嵐にきはふ木の葉さへ涙と共にみだれ散りつゝ、事に觸れて心ばそくかなしけれど、人やりならぬ道なれば、行きうしとてもどどまるべきにもあらず。何となく急ぎ立ちぬ。目かれせざりつるは、さだに荒れまさりつる庭も籬も、ましてど見廻はされて、したはしげなる人々の袖のしづくも慰めかねる中にも、侍従太夫など、あながちにうちくづしたるさまいと心苦しければ、さまざまいひ

こしらへ、閨のうちを見れば、むかしの枕さへさながら變らぬを見るにも、今更悲しくて、傍に書きつく。

と、いゆ置く古きまくらの塵を、だにわが立ちさらば誰かはらへん、代々に書きおかれける歌の草子ども、奥がきしてあざならぬ眼りと、ほりした、いゆて侍従の方へおくるとして、書きそへたる歌。

和歌の浦にかきと、いめたる藻鹽草、これを昔のかたみども見よ。あなかしこ横波かくな濱千鳥ひどかたならぬあどをおもは、い。之を見て侍従のかへり事いととくあり。

遂およもあだにはならし藻鹽草かたみを三代のあどよ殘せば、迷はまし教へざりせば濱千鳥ひどかたならぬあどをそれども、この返り事いと哀れなるにも、むかしの人に聞かせ奉りたくて、又打ちしはたれぬ、太夫の傍去らず馴れ來つるをふり捨てられなん、名殘あながちに思ひしりて、手習したるを見れば。

はるくくとい行くさき遠く慕はれていかにそなたの空を詠めん、と書きつけたるものより殊にあはれにて、おなじ紙にかきそへつ、つくづくと空ながめを戀しくは道とほくどもはや歸りこんどぞ慰むる。

消息文 中古の消息文は男漢女和の様なりしが、今や一致して其間遠からぬを見る、中古の「侍り」は變じて「候ふ」となり、「聞ゆ」は化して「申上」の語氣と爲らんとす、而しておのづから一種消息文体を成すべき萌は、ここに發したるなり。

頼朝より範頼へ

(東鑑)

十一月十四日の御ふみ正月六日に到來、今日はより脚力立んとし候ひつる程に、此脚力到來仰遣したる旨委しく承り候終ぬ、筑紫の事なぞかしたが、はざらんとこそ思ふ事にて候へ物さわがしから

ずして能々國に沙汰し給ふべし構へてく國の者どもに悪まれずしておはすべし馬の事誠にさるべき事にてはあれども平家は常に傾城を伺ふ事にてあればもしおのづから道にて押とられおどしたらん事は聞耳も見苦しき事にて有んずればつかはさぬなり又内藤六が周防のせいを以て志をさまたげ候以外の外の事也當時は國の者の心を破らぬ様なる事こそ吉事にてあらんずれまた八島に御座す大やけ并二位殿女房達など少しもあやまりあしさまなる事なくて迎へ取申させ給ふべしかくどだにも被露せられば二位殿などい大やけをぐしまゐらせて迎へざまはおはする事もあらん大方は帝王の御事今も始めぬ事なれども木曾は山の宮鳥羽の四宮討奉せて冥加つきてうせにき平家又三條高倉の宮討奉りて簡様に失んとする事也さればよくくしたゝめて敵をもらさずして閑に可被沙汰なり内府に極て臆病におはする人な

れば自害なせりよもせられじ生じりにとりて京へぐして上るべし扱世のすゑにも言傳へてあらば今少し吉事なり返々此大やけの御事おぼつかなき事也いかにもくして事なきやうにさたせさせ給ふべし大勢せにも此よしをよくく仰合られ候べし穴賢く

北條氏觸狀

(同上)

きんぺんのものに此由をふれてめしぐすべきなりわだのさゑもんつちやのひやうゑよこ山の者どもむほんをおこして君をいたてまつるといへどもべちの事なき也かたきのちりぐに成たるをいそぎうちとりて參らすべし。

阿佛尼の消息の内

(乳母の文)

何事も生ける程こそ詮なれ此世を別れん後の如何でもと申す人の候世に僻事と覚え候骨をば埋むとも名をば埋むまじと申す事

の候へば今の嘆きよりも勝りて心愛かるべき事と思し召し候へ御手なぞうまへてく美しく書かせ給ひ候へ手の筋は心々に好み折に従ふ事にて候へばどもかくも定め申し難う覺候ふ(中略)眞名は女の好むまじき事にて候ふなれども文字様歌の題に付けてさる様を知らぬ程ならんはをこがましく候ふ御覽じ知りて筆のすさびに書かせおはしまし候ふべく候墨附き筆の流れ夜の鶴にこまかに申げに候御覽候へ又ゑいわざと立てたる御能までこそ候はずとも人の形など美しくかき習ひて物語書など詞めづらしくつくり出て持たせおはしまし候へ大方書とてもかたくなならぬ程に書き習ひて御屏風の墨書き式紙なども書かせおはしましたらんこそよき御事にて候

作者作例 其二(歌)

西行法師 文章家としての紹介すでに終れり歌人として更に之を

歓迎すべし。

題知らず

吉野山櫻が枝に雪ちりて

花おそげなる年にもあるかな

道の邊に清水ながるゝ柳陰

しばしとてこそ立ちどまりつれ

津の國の難波の春は夢なれや

芦の枯葉に風わたるなり

吉野山やがて出でしと思ふ身を

花ちりなばど人や侍つらん

東のかたにまかりける時によみて侍りける

年たけて又こゆべしと思ひきや

命なりけりさよの中山

寂蓮法師 父は俊海阿闍梨とて俊成の弟子なり。されば叔父甥のよ
 しみにて俊成の養子と爲り。定長とて中務少輔たりしに。實子に定家の
 生まれしかば。自身より退きて出家せり。建仁二年没す。藤原清輔の弟に
 顯昭と云ふ僧ありて和歌の友なりしが。彼と博學にして才思は寂蓮に
 劣り。此は才思に富みて學問は顯昭に譲れり。顯昭は寂蓮を嘲りて曰く。
 和歌の藝は至りて難きものに非ず。其故は寂蓮不學なれども猶之を能
 くす。寂蓮答へて曰く。天下の藝の能くし難きもの。和歌にすぐるはな
 し。其故は顯昭博學なれども猶歌に堪能なるあたはず。以て其自ら重
 んせしを見るべし。

攝政太政大臣家百首歌合に

今はとて田面の雁もうちわびぬ

臚月夜のあけぼのゝそら

五十首歌奉りし時

暮れてゆく春の湊は知らぬども

霞におつる宇治の柴舟

入道前關白。右大臣に侍りける時。家の歌合に。

降りそむる今朝だに人の待たれつる

深山の里の雪の夕ぐれ

八月十五夜和歌所歌合に。月多秋友といふ事をよみ待るよ。

高砂の松も昔になりぬべし

なほ行末ハ秋の夜の月

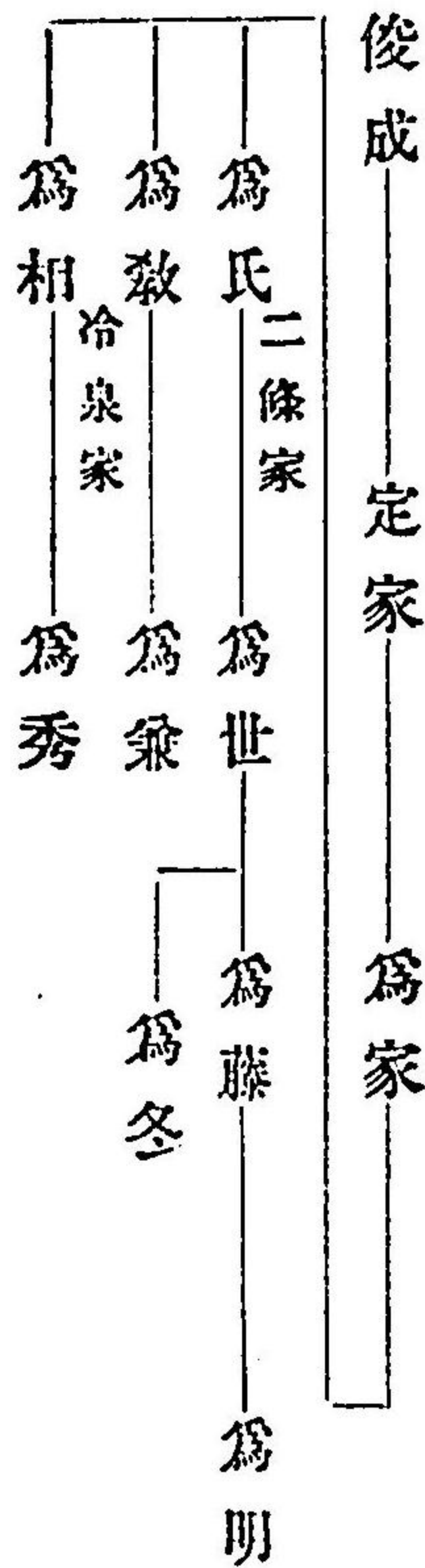
藤原俊成 皇太后宮太夫は百人一首にて讀まれ。五條三位は謠曲に
 て謠はる。共に官位と住所とにて此有名の歌人を呼びたるなり。父を權

中納言俊忠といひ、和歌の師をバ基俊といふ。歌よむ時はいつも古き淨衣を着、正座して桐の火桶をかゝへつゝ考を凝らしたるに依りて、世人その歌の風を桐火桶体と云へり。

安元二年六十二歳の時入道して釋阿と號す。老後ますます壯健にて御歌會ごとに參内し、後鳥羽天皇の御師範を勤めしかば、其御崇敬も淺からず。齡九十に満ちたる時、むかし光孝天皇の僧正遍昭に賜はりし例に習ひて、和歌所にて爲めに九十の賀筵を開かせ給へり。家長日記に其時の景況をしるして、和歌所の南におましよそひて(院ノ)御座とす。東の格子おろして此屏風一よろひ立て、俊成入道の座とす。西の座の上に攝政殿并に太政大臣それに並び、北さまに公卿さぶらひる。皆直衣なり。殿上人は東帶入道や、待たれて新三位定家朝臣に扶けられて參上る。たどしへなく老いかままりあへるに心ぐるし。世にながらへけるは今日を侍たれけるとあはれにかたじけなく見え侍りき。長押をも得上りや

らでひれふしたりしを、こどものすくひたて、予上り侍りし褥の上にも屈まり居られたりし法服姿、いつ忘るべしとも覺えずとあり、其嚴めしき儀式なりしを見て、歌人の榮譽こゝに至れるを思ふべし。

元久元年十一月九十一歳にて薨す。即その翌年なりき、著出には古來風体抄あり。家集を長秋詠藻と云ふ。長秋の支那にて皇太后宮の御所を稱ふる異名なれば、其官名を用ひしのみ。既に阿佛尼の下に謂へる如く、和歌所の地行所なご賜はりて和歌の家を開き、是より子孫相つぎて門閥を爲し、此道をもて朝廷に仕ふる事とは爲れり。今こゝに系譜を略記して參考に供へん。



太神宮に奉りける百首歌の中に若菜をよめる。
今日とてや磯菜つむらん伊勢島や

一志の浦の海士の少女子

攝政太政大臣家に五十首歌よみ侍りけるに。

又や見ん交野の御野の櫻がり

花の雪ちる春のわけぼの

百首の歌奉りける時秋の歌とてよめる。

夕されば野邊の秋風身にしみて

鶉なくなり深草の里

九月盡

暮れはつる夕の空をながむれば

雲こそ秋のなごりなりけれ

藤原良經 後京極攝政前太政大臣と重子の百人一首にて口ずさむ
は是なり祖父を法性寺忠通と云ひ父を後法性寺兼實と云ふ後鳥羽天
皇は其和歌に長じたるを以て常に重んじ用ひ給ひしが土御門天皇の
御代になりて建永元年良經の亭に行幸あらんとせし日曲者の爲めに
殺されたり歌は新古今体の主たる作者の一人にて家集を月清集と云
ふ常に秋篠月清と云ふ變名を用ひたるに依るなり。

残春のこゝろを。

吉野山花のふるさと跡たえて

むなしき枝に春風を吹く

百首歌奉りし時。

萩の葉に吹けば嵐の秋なるを

待ちける夜半のさをしかの聲

八月十五夜和歌所歌合に深山の月といふ事を。

深からぬ外山の庵の寐覺だに

さぞな木の間の月はさびしき

關路秋風

人すまぬ不波の關屋の板庇

あれにし後いたゞ秋の風

鴨長明 傳は既に云へり。

月前松風

ながひれば千々に物おもふ月に又

我身ひとつの峯の松風

海邊秋月

松島や沙くむ海士の秋の袖

月は物おもふ習ひのみかは

深山曉月

夜もすがらひとり深山の檜の葉に

曇るも澄める有明の月

羈中夕

枕とていづれの草に契るらん

ゆくをかぎりの野邊の夕暮

源實朝 鎌倉右大臣と稱せらる承久二年鶴岡にて公曉お弑せられし物語は歴史の語るところなればこゝには言はず。和歌の定家に學びたるが。萬葉の古体を好みて見識高く流行の風を見下したる姿ありて、

とにかくに當時の名匠たりしなり。家集を金槐集と云ふ。

櫻をよめる

春ふかみ花ちりかゝる山の井の

ふりよしみづに蛙なくなり
海の邊をすぐるとてよめる。

和田の原八重のしほぢにとぶかりの

翅の浪にあきかせずふく

ながめやる心もたえぬ和田の原

八重のしほぢのあきの夕暮

閑居望月

こけの庵にひとりながめて年もへぬ

友なき山のあきの夜の月

濱にいであたりしに海士のもしほ火をみて。

いつもかくさびしき物か芦のやに

たきすすさびたるあまのもしほ火

霞

武士の矢なみつくろふ籠手の上に

あられたばしる奈須のしの原

慈鎮和尚 名ハ慈圓吉水和尚とも稱へらる。慈鎮は其諡なり。前關白
忠通の子にて、大僧正に任じ延暦寺の座主と爲りたるが、何れも辭して
其職に居らざりき。

和歌の道にて後鳥羽天皇に召されしは、參内せしが、慈圓の歌を評
して、すぐれたる歌は何れの上手にも劣らねど、かくめづらしきさま
を好みりと仰せられしをりもありしと云ふ。

没年は詳ならざれど、建暦二年には、五十八歳なりしと云へり。

春

あさましや散りゆく花を惜しむ間に

櫛も摘まず關伽も汲まれず

秋

山里の竹の筧の細水よ

心して散れ峰のもみぢ葉

四季の今様

春の彌生の曙に。四方の山邊を見わたせば。花ざうりかも白雲の。か
からぬ峯こそなかりけれ。

花橋もにはふなり。軒の菖蒲もかをるなり。夕ぐれさまの五月雨に。

山時鳥名のりして。

秋のはじめになりぬれば。今年も半は過ぎにけり。我世ふけゆく月
影のかたよく見るころあはれなれ。

冬の夜寒の朝ぼらけ。契りし山路は雪ふかし。心のあどはつかねど
も。思ひやるこそはうなけれ。

藤原家隆 壬生中納言光隆の子にて。從二位宮内卿たり。俊成の門に
入りて定家と並び稱せらる。後鳥羽院に親しう仕へ奉りしうば。院の隠
岐におはしまして後も。常に題を賜はり歌を獻じなごして。あはれなる
御贈答どもありけり。嘉禎二年病に依りて剃髮し。名を佛性と改めて
攝津の天王寺に住み。契りあれば難波の里に宿り來て波の入日を拜み
つるかな。なごよみて。翌年の四月八十歳にて終れり。家集は壬生の二位
が歌なりとの意にて。壬二集と云ふ。生涯に歌數多くよみたる人よて。六
万首ばかりもありしとぞ。

落葉

木の葉ちる外山の暮をわけゆけば

袖に嵐のおどぞくだくる

夕

春の日はおほかた空のうすむより

くれゆく空の色ぞさひしき

山

ふるさとやいり日の末にながむれば

霞に残る天のうぐ山

秋

秋は來ぬ雲の旗手やいうならん

朝けのそらも面うはりしぬ

雑

明けば又越ゆべきやまの峰なれや

そらゆく月の末の白雲

羈旅暮

こゑやらで宿かるほどに暮れにけり

けさは雲井の遠山のまつ

承久三年七月以後遠所へよみて奉りし時

寐覺して聞かぬをきゝてかなしきは

荒磯波のあうつきの聲

後鳥羽院 新古今集に太上天皇と記したる御製是なり。歌道の奨勵者とおはしまし、事のすでに新古今の所よ云へり。御自らも名人とおしましつる事は左に示さん。歌道を論せさせ給ひし書を後鳥羽院御口傳と云ひ。隱岐にて都なる人々の歌を募り集め給へるを遠所歌合と名づけて。御みづうら判詞を書かせ給へり。延應元年二月御齡六十歳にて崩御あり。御家集も世に傳はれり。

春のはじめの歌

はのくくと春こそ空に來にけらし

天のかぐ山霞たなびく

水郷春望

見わたせば山本かすむ水無瀬川

夕は秋どなにおもひけん

夏の歌の中に。

山里の峰の雨雲どだえして

ゆふべすゞしき楨の下露

御即位の時の御製。

奥山のおどろが下も踏みわけて

道ある世ぞと人よ知らせん

隠岐にての御製。

我こそと新島守よ隠岐のうみの

あらしき波風心して吹け

藤原定家 父は俊成。官位は正二位權中納言たり。漢學をも能くし弓馬にも達したれど、歌の名高きにおははれて顯はれず。其家二條の北京極の西にありしをもて、世に京極黃門(黃門は中納言の異名)と呼ばれ、又嵯峨の小倉山に別莊を作りて住みけるより、其書風を嵯峨様など、稱ふるなり。世に傳ふる百人一首は、其別莊の障子に自ら書きて張りつけおきたる色紙なりとも云ふ。

天福元年七十一歳の時剃髮して明靜と號し。仁治二年八十歳にて終れり。歌道を論じたる書には詠歌大概、日記には明月記、家集には拾遺愚草、拾遺員外などあり。雨中吟、未來記、顯註密勘、僻案集、毎月抄、源氏奥入などのものもあり。

子に爲家あり、孫に爲氏爲相あり。爲氏爲相は阿佛尼の傳中に示したる細川庄のさわぎより、兄弟不和を生じ、爲氏は一家の歌道を立て、二條家と稱へ、爲相は家傳を守りて冷泉家と稱へたり。此に於て和歌に二條

冷泉の二流おこりぬ然れども二流の競争の文學史中に點つくるほどの勢力もあらざりしやうなり。

守覺法親王五十首よませけるに。

霜迷ふ空にしをれし雁がねの

かへるつばさに春雨を降る

秋の歌

明けば又秋の半も過ぎぬべし

そらゆく月の惜しきのみかは

旅の歌とてよめる。

旅人の袖ふきかへす秋風に

夕日さびしき峰のかけはし

山家雪

待つ人のふもとの道は絶ぬらん

軒端の杉に雪おもるなり

式子内親王 從三位成子と申して後白川天皇の皇女なり。賀茂齋院に立ち給ひしかば。萱の齋院とも。大炊御門齋院とも申し。又高倉宮とも申したり。御剃髪の後承如法と稱へ奉る。

春の歌

山ふかみ春ども知らぬ松の戸に

たえぐかゝる雪の玉水

齋院に侍りける時神館にて。

忘れぬや葵を草に引きむすび

假寐の野邊の露のわけばの

秋の歌

桐の葉もふみわけがたくなりけり

かきらず人を待つとなければ

題しらす

しるべせよ跡なき波に漕ぐ舟の

行方も知らぬ八重の汐風

宮内卿 右京太夫師光の娘にて、後鳥羽天皇の官女たり、増鏡に此人の事をいと若き齡にて底ひもなく深き心ばへをのみよみしこそいと有りがたく侍りけれ。云々。此人年つもるまで有らましかば、げにいかにかり目に見ぬぬ鬼神をも驚かしなましを、若くて失せにしいとく惜しくあたらしくなんどあるを思へば、惜しまれて早世せしなるべし。

春の歌

うすくこき野邊の緑の若草に

あどきで見ゆる雪のむら前え

山家暮春

柴の戸をさすや夕日のなごりなく

春くれあゝる山のはの雲

雨後月

月をなほ待つらんものか村雨の

はれゆく雲の末の里人

秋の歌

色かへぬ竹の葉しろく月さえて

つもらぬ雪を拂ふ秋風

俊成女 八條院に仕へて三條と呼ばれしとも云ふ、大納言通具に嫁したり、和歌はさすが大家のむすめとて、當時女流中の怪物とぞ稱美せられし。

千五百番歌合に。

風かよふ寐覺の袖の花の香よ

かをる枕の春の夜のゆめ

題しらす

霜枯はそことも見えぬ草の原

誰にとはまし秋のあざりを

藤原信實 定家以後の作者にて。歌の風体一ふしありて見るべきは信實なるべし。隆信と云ひし人の子にて。右京權太夫たり。畫をも能くし美術世界にも畫聖と稱せらるゝ人なり。文永二年十二月八十九歳にて卒す。著には今物語あり。

山花落花

花のみな散りての後ぞ山櫻

はらはぬ庭の見るべかりける

橋月

道とほき佐野のふな橋夜をかけて

月よぞ渡るあきの旅人

虫

浅ぢふの秋の夕のきりぐす

ねに鳴きぬべき時のまりけり

冬海雪

田子の海人の宿までうづむ富士の嶺の

雪もひとつに冬は來にけり

第二期

總論

今や文學史中の暗黒時代來れり。暗黒とは何ぞ。世の上流と流つもの文學に従事する暇なく。暇あるものも規律なき歌文を作り、自分一家の學問を事として謂はゆる不文者が社會の多數を占め、無學者が輿論を作り出だす時代を指すなり。諸君は前に承久の變起り、後に南北朝の亂來りしを知るならん。上を窺ふ逆徒は横領して朝廷あれども無きが如く。日に月に天下麻のやうに亂れ立ちて、人々安き心もなし。此時に當り忠臣は國の爲めに死し、義士は君の爲めに死す。豈また文學者たり、歌人たるを専門にするに暇あらんや。然れども幸にして、時なほ新古今の往時に近く、代いまだ盛衰記平家の作と遠からざりしかば、其熱急に去らずして、親房兼好頼阿の數人を、此劍光弦聲の間に見出したるは、天未だ彼にのみ私せざりしにぞ在るべき。況んや此暗黒の原因却つて好材料を與へつゝ、第二の盛衰記たる太平記を產生せしめし結果あるをや。南北

一致して足利氏將軍と爲り、天下の一先定まりたる如しと雖も、上には朝廷の衰微ますゝ、加はり、下には内亂絶えずして、嘉吉應仁の戰爭あり。遂に英雄互に割據して、中原と鹿を逐ふ世の中と爲り、はては、今や中古の光線を反射せし名所古跡は草むす屍の下に埋もれ、上古の音樂を反響せし佳境靈域は、矢叫びの聲もて満たされたり。如何でか、又南北朝に聞き得たりし先期文學の餘響を維持するに暇あるべき。文學の血統將に絶えんとする事糸筋の如く、脈々縷々、折らば落ちぬべき、萩の上の露にも比すべきなり。足利の驕奢も之を興す能はず、信玄謙信の智も之を興す能はず、信長秀吉の勇も之を興す能はず。却つて之を僧徒の手に一任して、毫も吝まざりしは、抑も亦亂世を處するの忙しき、そこまでに手の届かざりしが爲めのみ。

然れども右は統計上の論のみ、結果上の論のみ。此暗黒時代決して爲す事なくして、終りしものにあらざるを余は確かめんとするなり。統計上

とは何ぞ。作者作例の數寥々たるに就きてのみ論ずるを謂ふなり。結果上とは何ぞ。右の如く當期は好結果を見ざりしに就きてのみ論ずるを謂ふあり。

請ふ見よ秋毎に嵐ありて咲き揃ひたる草花を吹き荒すを然れども埋もれ居たる下草の之が爲に顔をあぐる喜びもあらん。戦争は人間の嵐なり。文學の花を吹き荒したる。固より其處なり。然れども之が爲め舊習を一洗して言語を自由にし。思想を自由にし。文章を自由にし。歌曲を自由にし。此不規律不文法の内に未來遠大の光明を認め得せしめしは。前後其比類を見ず。世の文學者たるもの單に中古に拘はるを知つて。近古に眼を轉せざるが多きは蓋し一方に偏せるのみ。片道に迷へるのみ。果して然らば當期の文章豈暗黒の二文字もて輕々しく抹殺し終らしむるのみにて止まんや。

然れども昨日の味方は今日の敵と云ふが戰國時代の風なれば。其弊は

猜忌の人情と爲り。及ぼしては武道に文道に遊藝に。すべて然らぬは無きに至れり。是れ即ち秘事傳授など云ふもの、起原なり。歌書の註釋よさへ秘事あり。和歌の用語にさへ傳授ありて。文學は師家の私事と爲り終らんとす。是併しながら世人舉つて文盲たらしめんとする政略の餘習を。文學の受け得たるものと謂ふべし。是より歌學上の智識と詠歌の用語とは狭少の物と爲りて。彼自由自在なる時文發達の光線と并進行爲す能はずして。衰運ますます下り坂に向はんとす。彼法式に限りある茶道能樂等は秘事傳授の必要を説く。或は然らん。此智識言語に限りなき歌道にまで及ぼすの理は果して何くに在るを知らざるなり。

言語文章

學者の古言を使い古文を擬せんとすれども。讀者舉つて學者ならざれば。書きたりとして解する者なし。是れ俗語まじりの文が行はれし所以な

り。俗人は古言を使ひ古文を擬せんとすれども書きこなすだけの學力なければ實用を爲さず。是れ俗語文章の世の中と爲りたる所以なり。然れども俗文かならずしも純粹の俗文ならず。古文体また純粹の雅文ならず。半雅半俗なるものも多く。或は兩端に偏したるも少なからぬ。即ち流行を自然に任じて制御するものなかりしが故のみ。

遙かに上古を顧みれば言文いまだ分離せざりしが。中古頃は言文やゝ途を異よし。近古の第一期は言文ほとんど并形の形を爲し。第二期には著るしく兩端の語脈語勢に相違を見るに至れり。而して此相違を見せたる言文二者は。或は合ひ或は離れて。決して親睦を破らざりしものなり。

職人畫歌合の詞書に。

赤土器ハ召すまじきか。歸り足にて安く候ふヲ。土器作りの詞
 白布めせのう。はたばりも尺もよく候ふハ。白布賣の詞

狂言の詞よ。

罷り出でたるはあたりの茶屋で御座る。行き來る人に今日も茶を賣らうと存ずる。さてもく。今日はさびしい事ヲ。人通りも御座らぬヨ。薩摩守

いやわごりよは何を言はしますヲ。某が畑へはねた竹の子ぢやに依つて取る。そちのでい有るまい。むさとした事ヲ。おしやつヲ。竹子など有るを讀まば。當期俗語の幾分か古色を帯びつゝ。明治言語に甚だ近より來りしを知るべし。ぞと云ひかなト。云ひよト。云ひなト。おしやつヲ。と云ふ如き古言の語体を失はずして。御座ると云ひぢやと云ひまいと云ふ如き。俗語専用の語勢をまじへたるに心づくべきなり。又色艶も無く有りのまゝを記したる實用文に。公事根源ヨ。

撰虫。これはあながち式ある事ニ。あらず。殿上の逍遙とて。殿上人ト。ども遊びて嵯峨野などへ向ひて。虫を籠に撰び入れて奉る。これは

堀川院の御時より始まる。大凡松虫鈴虫などの誰人も内裏に奉る。装束拾要抄に。

日蔭蔓ト云フハ。白糸ヲアゲマキニシテ。左右ニ八筋或ハ十二筋ナ
ド冠ノ左右ノ角ニマトヒテ垂ル事アリ。是ハ蘿ト云フ草ヲバ日蔭
草ト云フ。神代ニ此草ヲカヅラニ仕タル事日本紀に見エタリ。下苔
ト云フ物也。草ナドハ清淨ナルニヨテ。神事ノ飾ニ用フル心也。
など云ふが如きあり。以て其一斑を見るべし。

語格假名遣

上古の語格假名遣は中古に至りて多少の沿革を來せり。是れ遷都以後の地と人との依りて生じたる結果のみ。遂に中央集權の在るところに歸して一途無別法の文法語格を組織して近古に授けたり。近古は之を受け取りて業いまだ卒らざるも、兵亂世變の爲めに妨げられしかば、今

や銘々勝手の文法を用ひんとす。此に於て定家は假名遣を定めて之を救とんとしたれど、其功あらはれずして、世はまた修羅道の街となりぬ。第二期に至りてはます／＼亂れて、又語格假名遣の何事なるを辨ふるものも無く、聞ゆるは聞ふるど亂れ、報いはばやと變り、申しは申せしども爲り、又いふをゆふに言ひかけて、海に沈めんと夕言波にど云ひ、あわを、あはに言ひかけて、ゆく水のわはれ(泡)世をど云ふが如きにて、大方は想像せらるべし。是れ一般の流行をなしたれども、順序ある沿革にあらざりしが故に、後世より非難を受けて暗黒時代の惡分子たりと稱せらるゝも、止むを得ざるなり。近世時代を約したる語學の再興は待遠き感なき能はず。

和歌

南北朝の頃は見るべき猶多し、新葉集に。

芳野の行宮にて五月雨時間なかりける頃、雨師の社へ止雨の奉幣使など奉られける頃、思し食しつゞけさせ給ひける。

後醍醐天皇

此里は丹生の川上はどちかし

祈らば晴れよ五月雨の空

賀名生の行宮にて人々歌よみ侍りける中に、

冷泉入道前右大臣

忘れめや御垣に近き丹生川の

ながれにうきて下る秋霧

などあるを讀まば、猶新古今に程遠からぬを見るべし、然れども是より次第に氣力なき模型物と爲りゆきて、兼好頼阿の數人を殘す外は、作例を示すよ足るものいと少なし。

此時に至り彼言語文章にあらはれたる自由の空氣は和歌の部分に歴

入し、俗語を交へて三十一字の歌をよむ事はじまりぬ。

影法師見ぐるしければ辻相撲

月をうしろになして寝るかな

賣りつくすたいたう餅や饅頭の

聲はのかなる夕月夜かな

などの如く、唯遊興にするもあり、其他或は教訓の爲めに或は説明の爲めにするありて、彼中古以來の落首と共に和歌と俗語との連絡を附けたるものなり。抑も此事はすでに後鳥羽院の和歌所より有心座無心座と二つの座を構へ、有心座をば柿本と名づけて本歌よみを置き、無心座をば栗本と名づけて俗歌よみを置き給ひし事もありて、此時起らんとせしなるが、当期を待ちて普く行いゝに至りしなり。今や將に平民歌道起らんとす。

勅撰

當期の勅撰を例に依りて示せば左の如し。前期は論じ盡したれば又更に言はず。

續後拾遺集

後醍醐天皇の元亨三年に成る。撰者は爲藤。

風雅集

後村上天皇の正平年中に成る。撰者は花園院。

新千載集

北朝にて後光嚴天皇の御時に成る。撰者は爲定。

新拾遺集

同朝にて同じ御時成る。撰者は爲明。

新後拾遺集

同朝にて後圓融天皇の御時成る。撰者は爲遠。

新續古今集

後花園天皇の永享年中に成る。撰者は雅世。

是にて全く二十一代集を終れり。此外に長慶天皇の弘和元年勅を奉じて中務卿宗良親王の撰ひ給ひし新葉集あり。南北朝時代の和歌を代表するに足るものなり。此時いまだ日光を去る事遠からず。暗夜に入るなほ淺かりしかば、右六代集をおほふばかりの光明は新葉集の上より仰が

れしものを再び新葉集の昔にさへ歸らずして止みぬるのさても時勢なるかな。況んや新古今の前期は呼べども又と應へざるをや。

連歌

連歌は上古に生まれて中古に育ちし事すでに謂へり。近古に至りては後鳥羽土御門順徳の三帝この道を好ませ給ひ。追々に開けゆきたるが。花園天皇の頃に善阿法師ありて。其門弟に順覺、信照、救濟、良阿出で、貞治應永間には専ら此救濟法師宗匠となりて連歌を興し、其れより傳はり、て宗砌心敬より宗祇に至り宗長、宗碩、宗牧、宗養、紹巴と相續していよゝゝ和歌をも歴する程の隆盛を爲したり。此に於て上の句に下の句を附くる位の簡單の物ならずして十句二十句より百句までに及ぶものあり。規則も定まりて一派の術と爲れり。然れども今は又中古の時鳥名をも雲井にあぐるかな。

弓張月のいるにまかせて
などの雅致あるものならずして。

移ろふか花に見ざりし夕霞(甲者)

さくらがうへの山のはの月(乙者)

春深きふもとの里に鐘鳴りて(丙者)

などの如く。

消えぬるかいざ白雲を峯の雪(甲者)

花まつ山にひかふおもかけ(乙者)

春の日のほのめく梢とりなきて(丙者)

などの如く、唯長き歌を數人してよむと云ふ外には、言葉の上より曲もな
く、意味の間に巧をも用ひざるものと爲れり。抑も足利時代は茶道の流
行せし時代なり、儀式ばりたる交際の流行せし時代なり、彼茶道と共に
此交際に用ひられて、猛きものゝ心の心を僅かに和らげたるは連歌

なるべし、然らば連歌は文學上の趣味に起りて、交際の慰みに盛なり
しものとや言はん。豊太閤の陣中なほ此文學を弄ぶを見る。相對すれば
動もすれば相闘はんとする武將の殺氣を、この一興に向はしめたる方
略なるを想ふべし。

歌曲

俗語は文を蠶食し歌を蠶食し、今又更に歌曲を噛み盡せり、是と同時に
俗調俚諺の流行歌も筆に載せらるゝ世と爲りて、雅俗の親睦いよゝ
其効を奏せんとす、見るべし、當期小歌の狂言に謠はれて、明治の今日現
に聞かるゝものあるを。

宇治のさらしに、島に洲崎に、立つ波をつけて、はんま千鳥の友呼ぶ
聲は、ちりくちりく、やちりくちりく、やちりくちりくと、友呼ぶ處に、嶋陰
よりも、戀の音が、からりころり、からりころりと、漕ぎ出だいて、釣す

る所に釣つた處が面白いとの(宇治のさらし)
 いたいけしたるものあり。張子の顔や塗乳兒し、しや結びに笹結
 び。山科結び風車。瓢箪にやせる山雀。胡桃に耽る友鳥。虎まだらの
 ゑのころ。おきやがり小法師ふり鼓。手鞠や踊り鞠小弓。
 など其例なり。

曲舞と謠曲

右の小歌を彼白拍子の今様に比べ、更に神樂催馬樂風俗に比ぶれば、用語は雅俗の相違を見、思想に古今の差別を見るのみにて、長短精粗の點に至りては甚しく異なるを見ず、今や是のみみて満足しがたきは人情の進歩なれば、此も於て曲舞歌くまうたおこなはる。或は神佛の縁起を述べ、或は名所舊跡の景色を寫し、或は忠臣孝子の事蹟を作りなどしつゝ、感情長く思想密なるを以て、次第に勢力を足利初期に得たるなり。一例を示せば。

ば。

松浦物狂

生國は筑紫肥前の者。在所は松浦。わざと名字をば申さぬなり。或人の妻にていひしが。夫は讒臣の申事により、無實の科を蒙り。都へ上り給ひしが。かつて音信聞かざれば、死生をだにもわきまへず。あまり別れの悲しさに、ある夕暮に、我等唯二人。玉島や松浦のうらに立ち出づる。都の方へ行く舟の便りを待つべき所に、男一人來りて。我この舟の船頭なり。御姿を見奉るに、よのつねならぬ人なれば、痛はしくおもひ申すなり。どく／＼船に召さるべし。都までは送りといへ申さんと。懇に語れば、誠ぞと心得て、手を合せ禮拜す。急ぎ船に乗りうつり。其時水主楫取ども、順風に帆を揚げて、海路を走り行くほどに、ほそなく津の國須摩の浦に着く。波の關守る處なれば、この浦に船をさしこむ。

の如き是なり。然れども思ふ事一つかなへば又一つと云ふは人情の常なれば。猶此上の欲望を請求して止まず。遂に室町將軍の頭に至りて。謠曲の新作を促し出だせり。

彼曲舞歌は舞ふ部分だけを作りしものなるが。其れに前後の文を加へ。對話の詞を入れ。發端の章を置きなどして一段完全の作となしたるもの出づ。謠曲是なり。先づ其趣向を言へば。第一に神佛の縁起を作りて。御代を祝し信心を勸むる種類あり。第二に英雄美人の幽靈を現じ鳥獸草木の精魂を出だして。因果應報悉皆成佛の理を説く種類あり。第三に忠臣孝子の物語を作りて。武門の庭訓を含ましむるあり。第四に慈母節婦の真情を表して。不徳社會を戒むるあり。此他にも猶多し。而して其語るどころ謠ふどころ。説法に非ず。教訓に非ず。優美に快樂に悲壯に凄凉に。人情を喜ばせつゝ泣かせつゝ。奮はせつゝ身にしませつゝ。之を導かんとするものなれば。一たび出づるや争うて世に珍重せられ。室町家に寵

て幕府の式樂たる地位を占めたり。

抑も謠曲には謠ふ部分と語る部分とあり。謠ふ部分は歌曲にして。古雅なる文語を主とし。語る部分は對話にして。通俗なる言語を主とす。是れ雅俗一致して構造を大にせる所以の第一なり。從來の舞曲は謠手と舞手との二者より成る。謠曲は更に舞手なる役者を増加して。主たるものをシテとし客たるものをウキとし附屬せるものをツレトモとして。互に對話問答せしめ。其謠ふ部分を地謠に専任せしむる仕組となりぬ。是れ構造を大にせる所以の第二なり。

先づ其謠ふ部分に就きて例を示せば。

むつかしや。難波の浦のよしあしも。いやしき海人はえぞ知らぬ。ただ世をわたるためなれば。假の命つがんどて。蘆を取りはこびて。此市にいつる蘆數に。おわしそへてめされよや。おわしそへてめされよ。露ながら。難波の蘆を刈りもちて。夜は月をもはこぶなりや。いと

まをし夕沙のひるの内にもめされひよやひるの内にもめされよ(藍刈)
 これは芦賣る男の唱歌なり。月影まで載せて運ぶより今日の營業に
 別るゝ事のならしきを言ふなぞ、優美極りなきに非ずや。

持ちかぬる。沙くむ桶の苦しきに。又ちからづく老の杖。つたなきわ
 ざを須磨の浦。ながめにうさや忘るらん。面白や浦に入日は海上に
 うかび。須磨や明石の浦のさま。鹽焼く海人の心にも。さも面白う候
 ふなり。南をはるかにながむれば。雲につける紀の路の小島。山良
 の戸わたる早舟も。沙追風の吹上や。遠浦ながら住吉の。松こそ見ゆ
 れ海をしに。富島の磯屋。昆陽難波。名には繪島といひながら。いかで
 か筆にも及ぶべき。あらおもしろの浦のけしきや。げにや面白き。海
 人の磯屋とや。淡路瀉。あは沖舟のこぎくるは。雨こそめれ今一かへ
 りも。沙くめや人々。絃上

これは沙汲むを營業とする須磨の海人の。老も忘れて名所を楽しむ心

を誦へるなり。入日も雨も皆幸福なる感情を刺撃す。感謝の意をも含め
 るに非ずや。

散らぬ先にと尋ねゆく。花をや風の誘ふらん。(春榮)
 は囚人となりたる弟の殺されぬ内にと急ぐ心を述べ。

釣瓶の水に影おちて。袂を月やのするらん。(檜垣)
 は水汲む女のおもしろき生活を誦へるなり。何れも短歌長歌にて言は
 れぬ風情を能く寫したるは。謠曲の特點に非ずや。詠歌として唱歌とし
 て。前代未曾有の妙味を備へたる文學たるは。一讀して知らるべし。
 其語る部分に就きて例を示せば。

判官如何に辨慶。シテ御前も候ふ。判官唯今旅人の申して通りつる
 事を聞いてあるか。シテいや何とも承らず候ふ。判官安宅の湊に新
 關を立て。山伏を堅く撰ぶところを申しつれ。シテ言語道斷の御事
 にて候ふ物かな。扱は御下向を存じて立てたる關と存じ候ふ。是は

も、しき御大事にて候ふ。まづ此傍にて暫く御談合あらうするよ
て候ふ。ツレ我等が心中には何程の事の候ふべき。唯打ち破つて御
通りわれかしと存じ候ふ。シテ暫く仰せの如く此關一所打ち破つ
て御通りあらうするは易き事にて候へども、御出で候はんずる行
末が御大事にて候ふ。唯何ともして無異の義が然るべからうする
と存じ候ふ。判官、兎も角も辨慶はからひ候へ。シテ畏つて候ふ。安宅
是は義經の一行安宅の關にかゝる前路傍にての問答なり。一寛一嚴君
臣老若其分を得たる談合。今耳又聞くが如し。盛衰記平家物語より化し
來りて。活氣筆に溢れたるものと謂ふべし。

シテ「何ぞ舟を捜さうとや。獵師の身にては舟を捜されたるも家を
捜されたるも同じことぞかし。身こそ卑しく思ふども。此處にては
翁もにつくき者ぞかし。孫もあり彦もあり。山々谷々の者どもいで
合ひて。あの狼籍人を討ちとり候へ。」(國栖)

是は吉野の神の漁翁と現じて、大海人皇子を舟の下にかくまひ申し。敵
兵の舟の中が怪しといふに答へ給へる詞なり。凜然侵すべからざる威
嚴は既に神たるを證する大文字にあらうや。前後の文學界に此種の文
章幾許かある。

「ロキ」老母の痛はりはさる事なれども。此春ばかりの花見の友。いか
でか見すて給ふべき。シテ「御言葉を返せば恐れなれども。花は春あ
れば今に限るべからず。是はあだなる玉の緒の。長き別れとなりや
せん。唯御暇を賜はり候ず。ロキ、いや、左様に心よわき。身にまか
せては叶ふまじい。で、心をなぐさみの。花見の車同車にて。共に
心を慰まんと。云々(熊野)

是は平宗盛と愛妾熊野との問答なり。熊野は老母の病氣とて孝行故に
暇を乞ひ。宗盛は花見の同行者として私愛の爲に暇を許さず。其相異なる
点を畫がき得て盡せりと謂ふべし。當時の言語改良の標準と爲りたる

ものにやあらん。
 更に進みて文學上の價直を言ひ、古歌古詩を上手に用ひて面白く新しく取り成したる。是れ一つ。古事古傳の種あるものを大きく作り替へて當時の人情に合せたる。是れ二つ。彼安達原一名は黒塚は後撰集の、陸奥の安達が原の黒塚に鬼こもれりと聞くは誠か^{まこと}を本として遂に鬼女の庵中に客僧を留めたる一段と爲り、彼胡蝶の雅樂の童舞に胡蝶の装して舞ふ事あるを本として、遂に蝶の身の梅花の緑なき事を嘆き、法華經の功德を頼み來たる一段と爲りたる類を謂ふなり。次には和漢語勢の離合する所突然ならずして、誘引^{いびん}の文字あれば松風^{しょうふう}と受け、王母と云へば春風^{しゅんぷう}と讀まする如き。配合其妙を得て、十分の一致親睦を圖りし事、是れ三つ。

長所特點右の如し。故に余は此謠曲を以て近古第二期の文學を代表せしめんとするものなり。謠曲何を婚禮の専有物として輕々看過すべし

んや。此暗黒時代の末世を破りて、一點の電氣燈を掲げたるは此文あるのみ。

狂言

謠曲は附屬して滑稽を主とするものを狂言と云ふ。徹頭徹尾諧謔を以て満たされ、讀者聽者を笑はせつゝ、能く之を嘲罵し、之を勸戒し、以て彼優美悲哀なる謠曲と反映せしむるものなり。

抑も滑稽諧謔の文章上にあらはれたるものを調査すれば、中古にしては竹取物語に、

からうじて起き上り給へるを見れば、風いと重き人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、李を二つ附けたるやうなり。

などあるを始めとして、源氏枕草紙より今昔宇治拾遺に至るまで、又近古になりては十訓著聞集の類、文中に之を見る事少なからざれども、全

篇の精神人を笑はしむるを主とし、字句悉く此分子を組立てたるものは、狂言を最初とすべし。故あるかな近世の滑稽諧謔を主とする文章。多く其源をこゝに取る事は。

又その文章にあらはれざりしものを調査すれば、謂はゆる「猿がうわぎ」として禁中御神事のあとなどにて餘興又行はれしものあり。是れ明治社會に行はるゝ「茶番」にはかなどの類にて、始めは臨時に趣向を設け、隨意又演したるが、遂に謠曲と共に發達進歩して此趣味價直ある狂言をなし。此雅致風流なる俗語文章を見せたるなり。

余常に曰ふ、狂言は足利詞の蓄音器なりと、其故何ぞや。

主人「太郎冠者あるかやアイ。從者御前に。主人念のう早かつた。汝呼び出す別の事で無い。」

などあるは當時大名の聲色に非ずや。

客「不案内に御座る。主初對面に御座る。客今日は思しめしよらせら

れて太郎冠者を下されて、かやうの忝い事は御座らぬ。主誠に今日は御用の御座るを欠かせられて御出の段近頃忝う御座る。客是は御懇懃な御禮で御座る。

などあるは、當時主客對面の聲色に非ずや。

貝ノ聲「ツワァイ、ツワァイ。」

鐘ノ聲「ジャアンモンモンモン。」

犬ノ聲「ベウ〜。」

狐ノ聲「クワイ〜。」

などあるは、當時の耳に聞き得しまゝの聲に非ずや。其他呼聲掛聲に至るまで當時のものならざるは無し。狂言は既に聽きて面白きものなり。見てなほ面白きものなり。讀んで更に味はるゝものなり。徳川時代初期の文學、おほくは此足利詞より轉じ來りて半言半文体のものを見る。豈狂言の勢力大なりしもの無からんや。

草紙

當期の一現象として草紙と云ふもの起りぬ。中古の物語草紙を學んで之に摸擬せず。近古の軍記傳記を學んで之に摸擬せず。唯やすらかに自然なる當期通俗の言葉を用ひて語るべく謠ふべく古今の話を作り爲したるもの是なり。是等の種類を拾ひ集めて世に傳へたるものを御伽草子と云ふ。それには。

- 文正草紙
- 小野小町
- 唐糸草子
- 七草草子
- 物艸太郎
- 蛤の草子
- 鉢かづき
- 御曹司島わたり
- 木幡ぎつね
- 猿源氏草子
- さいれいし
- 子敦盛

- 二十四孝
- のせざる草紙
- 濱出草紙
- 一寸法師
- 浦島太郎
- 横笛草子
- 梵天國
- 猫の草子
- 和泉式部
- さかさ
- 酒顛童子

などの二十三種ありて、其一二例を示せば。

後々とても此草紙見給うて、親孝行に候はゞ、かくの如く富み榮えて、現當二世のねがひ立ちどころに叶ふべし。先づ現世にては七難即滅し障もなく、衆人愛敬ありて末繁昌なるべし。後の世にては必佛果を得べき事疑なし。偏に親孝行にして此草子を人にも御讀み聞かせあるべし。(蛤の草子)

さりながら生れ落ちてより後、せい一寸ありければ、頼て其名を一

寸法師と名づけたり。年月を経るほどにはや十二三になるまで育てぬれども、せいも人ならず。つくづくと思ひけるは、只物にては非ず。唯化物風情にてこそ候へ。我如何なる罪の報いにてかやうの物をば。住吉より賜はりたるや。あさましさよと見る目も不憫なり。夫婦思ひける様は、わの一寸法師めを何方へも遣らばやと思ひけると申せば、頓て一寸法師。此由承はり親にもかやうに思はるゝも口惜しき次第かな。何方へも行かばやと思ひ。刀なくては如何と思ひ。針を一つ乳母に乞ひ給へば、取り出だしたびにける。即ち麥藁にて柄鞘をこしらへ、都へ上らばやと思ひしや。自然舟なくては如何あるべきとて、又乳母に御器と箸とたべと申し受け、名殘惜しくと、むれども立ち出でにけり。(一寸法師)

今之を謠曲文に合せ見ても、当期の文學相待つてますます言文近似の傾を爲したるを悟らん。

作者作例 其一(文)

吉田兼好 徒然草とて世にもてはやさるゝ草紙の作者は此人なり。花は盛に月は隈なきをのみ見るものかはと人に詠記せらるゝ文章の作者は此人なり。京都の吉田神官卜部兼顯の子にて、俗なりし時は、かねよしと云へりしが、四十二の時出家して、其まゝ音讀に「けんかう」と稱へたり。

それより木曾の山中に住みたるが、或時國守の従者あまたつれて鷹狩に來しが、騒がしきとて、「こゝも又浮世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな」とよみ、何くも同じ事とて再び都に歸り住めり。其後伊賀老後また都に歸りて、雙岡に庵を作り、櫻を植ゑ、塔婆を立てゝ、植ゑ置きし花とならびの岡のべにあはれ幾世の春を過さんと彫り附けたり。

頼阿とは殊に親友なりしかば協力して内野にて六時念佛を施行し。大釜に粥を煮て貧人に救助せしをりもありき。又何年頃の事か。攝津の安倍野に住みて弟子と共に菴を織り之を商ひて露命をつなぎたるをりもありき。

正平五年六十八歳の時伊賀の旅行中に没す跡に残したるは。

古筆經文 自筆老子經 源氏須磨明石卷 頼阿筆幻卷

神代紀 反故手習書十二包 墨衣二襲

のみなりしとぞ。以てその平生の嗜好と性質とを見るに足らん。

遺稿は家集と徒然草あるのみ。徒然草は哲學的の觀念と文學上の趣味を以て満たされたる隨筆なり。

○ (徒然草)

五月五日賀茂の競馬を見侍りしに。車の前より雜人立ちへだて、見えざりしかば。たのく下りて埒の際によりたれど。殊に人多く立

ち込みて分け入りぬべきやうもなし。うゝる折は向ひなる棟の木に法師の登りて。木のまたについで物見るあり。取りつきながらいたう眠りて。落ちぬべき時又目を覺す事度々なり。是を見る人嘲りわざみて。世のしれものかな。かく危き枝の上にて安き心ありて眠るらんよといふ。我心にふと思ひしまゝに。我等が生死の到來唯今にもやあらん。それを忘れて物見て日を暮らす。愚なる事は猶まさりたるものと言ひたれば。前なる人ども。誠にさにこそ候ひけれ。尤愚に候ふと言ひて。皆うしろを見かへりて。こゝへ入らせ給へ。とて處をさりて呼び入れ侍りにき。かほせのことわり誰かは思ひよらざらん。なれども。折からの思ひかけぬ心地して胸にあたりけるにや。人木石にあらねば時にとりて物に感ずる事なきにあらす。

○ (同上)

人の田を論ずるもの、訴にまけてねたさに、其田を蒔りて取れどて人をつかはしけるに、先づ道すがらの田をさへ蒔りもて行くを、是は論じ給ふ處にあらす。如何にかくはと言ひければ、蒔る者ども、そこども蒔るべき道理なければ、僻事せんとてまかる者なれば、いづくをか蒔らざらんとぞ言ひける。ことわりいとをかしかりけり。

○ (同上)

秋の月は限りなくめでたきものなり。いつども月ばかりこそあれどて思ひわかざらん人は、無下に心うかるべき事なり。

(同上)

八つになりし年父に問うて曰く、佛はいかなるものにか候ふらんといふ。父が曰く、佛には人のなりたるなりと。又問ふ。人は何として佛にはなり候ふやらんと。父又佛の教へによりてなるなりと答ふ。又問ふ。教へ候ひける佛をば何が教へ候ひけると。まゝ答ふ。それも

又さきの佛の教へよりてなり給ふなりと。また問ふ。其教へ初め候ひける第一の佛はいかなる佛にか候ひけるといふ時、父空よりやふりけん土よりやわきけんといひて笑ふ。問ひつめられて得答へずなり侍りつと。諸人にかたりて興じき。

北畠親房 南朝の忠臣にさる人ありと知られたる親房は、又文學史中の忠臣なり。權大納言師重の子にて大納言たりしが、元徳二年剃髮して宗玄と號す。

元弘三年後醍醐天皇隱岐より還御の後、ふたゝび仕へて朝敵追討に功ありし爲め、正平五年准三后と爲る。是より北畠准后と呼ばれたり。同じき九年一説には十四年薨す。著書は職原抄、元々集、二十一社記、古今集注、東家秘傳、神皇正統記あり。

中にも正統記は天皇の御正統全く南朝に在る事を知らせんとて、神代

より後村上天皇までの歴史を記せるなり。文中に議論を挟み意見を述べて感慨これが主となり。文これが従たる處に記者精神の溢れたるを見るべし。

正統記の内

さても舊都には戊寅の年の冬改元して曆應とぞ云ひける。吉野の宮には本の延元の號なれば國々も思ひくゝの號なり。唐土にはかかるためし多けれど此國には例なし。されど四年にもなりぬるにや。大日本島根は本よりの皇都なり。内侍所神璽も吉野におはしませば。いづくり都にあらざるべき。さても八月の十日あまり六日や。秋霧よをかされ給ひてかくれまし。くぬとぞ聞えし。寐るがうちなる夢の世。今に始めぬ習ひどの知りながら。數々目の前なる心地して老の涙もかきあへねば。筆の跡さへ滞りぬ。昔仲尼は獲麟に筆を絶つとあれば。こゝにてとゞまりたく侍れど。神皇正統のよこしき

なるまじき理を申しのべて。素意の末をもあらはさまほしくて。しひて記しつけ侍るなり。兼ねて時をもさどらしめ給ひけるにや。前の夜より親王をば左大臣の第へうつし奉られて。三種の神器を傳へ申さる。後の號をば仰のまゝにて後醍醐の天皇と申す。天下を治め給ふ事二十一年。五十二歳おまし。くき。昔仲哀天皇熊襲を攻めさせ給ひし時。行宮にて神さりまし。くき。されど神功皇后はどなく三韓を平らげ。諸皇子の亂を鎮められて胎中天皇の御代に定まりき。この君聖運まし。くしかば。百七十餘年中絶えにし一統の天下をしらせ給ひて。御目の前にて日嗣を定めさせ給ひぬ。功もなく徳もなき盗人世におこりて。四年あまりが程宸襟をなやまし御世とすぐさせ給ひぬれば。御怨念の末空しく侍りなんや。今の帝また天照大神よりこのかたの正統を受けまし。くぬれば。此御光よ争ひ奉る者やは有るべき。中々かくて鎮まるべき時の運とぞ覺え侍

る。

太平記 南北兩統の争戦を記したる軍物語にて、謂はゆる第二期の盛衰記たるものは是のみ。作者は玄惠法師なりとも、慧珍法師の起稿せしを玄慧の作り改めたるとも。又近來の説にては小島法師なりとも云へり。玄慧は權大僧都に任せられ號を獨清軒また健叟と云ひて、文章を能くし漢學を能くし、法律學に達し、常に後醍醐天皇に召され、又足利尊氏兄弟にも重んぜられてしばしば往復せし人なれば、或はさも有りな。建武式目も此僧の力おほきと居る。正平五年没せり。

○

去程に類火東西より吹かれて餘烟皇居に懸りければ、主上を始め參らせて宮々卿相雲客皆かちはだしなる体にて、いづくを指すともなく足にまかせて落ち行き給ふ。此人々始め一二町が程こそ主

上を扶け參らせて、前後より御供をも申されたりけれ。雨風烈しく道開くして敵の鬨の聲こゝかしこに聞えければ、次第に別々になりて、後又はたゞ藤房季房二人より外は主上の御手を引き參らす人もなし。忝くも十禪の天子玉体を田夫野人の形に替へさせ給ひて、そこども知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こそあさましけれ。いかにもして夜の内に赤坂の城へと御心計をつくされければ、も假にも未だ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して一足には休み二足には立ちどまり、晝は道の傍なる青塚のかげに御身を隠させ給ひて、寒草の疎なるを御座の褥とし、夜の人も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて、羅殼の御袖をはしあへず、兎角して夜晝三日に山城の多賀郡なる有王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。藤房も季房も三日まで口中の食を断ちければ、足たゆみ身疲れて、今はいかなる目よ逢ふとも逃げぬべき心地せざりければ、詮方

なくて幽谷の岩を枕にて。君臣兄弟諸どもに現の夢に臥し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかど聞し召されて木陰に立ちよらせ給ひたれば。下露のはらくと御袖にかゝりけるを主上御覽せられて。

さして行く笠置の山を出でしより天が下に隠れがもなし。藤房涙をおさへて。

いかにせん頼む陰とて立ちよれば猶袖ぬらす松の下露。山城の國の住人深須の入道松井藏人二人此邊の案内者なりければ。山々峯々残る所なく搜しける間。皇居隠れなく尋ね出だされさせ給ふ。主上誠に怖ろしげなる御氣色よて。汝等心有る者ならば。天恩を戴きて私の榮花を期せよと仰せられければ。さしもの深須入道俄に心變じて。おはれ此君を隠し奉りて義兵を揚げばやと思ひけれども。跡に續ける松井が所存知り難かりける間。事の漏れ易くして道

の成り難からん事を量りて。黙しけるこそうたてけれ。俄の事にて網代の輿だに無かりければ。張輿の怪しげなるに扶けのせ參らせ。て。先南都の内山へ入れ奉る。其体只股の湯王夏臺に囚はれ。越王會稽に降せし昔の夢に異ならず。是を見る人毎又袖をぬらさずと云ふ事なかりけり。

一條兼良 世に一條禪閣また後成恩寺殿と稱ふるは是なり。太政大臣攝政關白たりしが。文明五年剃髮して覺惠と號す。

兼良博學多識にて著書頗る多く。殊に連歌を好みしかば。之を撰ひ集めて新玉集と名づけ。奏覽を経て勅撰に擬せんとせしに。應仁兵亂の爲め奪ひ去られて。又一枚一字をだに遺さゞりしと云ふ。文明十三年八十歳にて薨す。

著述の名あるものを擧ぐれば。公事根元。文明一統記。樵談治要。東齋隨筆。

桃華葉葉。花鳥餘情。歌林良材。藤川記。小夜寢覺等なり。文は質素にして實用のもの極めて多し。

内侍所御神樂

(公事根源)

主上行幸あり。先づ典侍掌侍まゐる。すけは童二人に几張をさゝす。内侍所に行幸なりぬれば御拜刀自祝詞など申す。此間所作人南殿の西の方にて物の音あひす。内侍所の前に主殿寮幔を引きて官人庭燎をたく。本末の座二行に設けたり。近衛の召人うしろにあり。人長末に横座なり。次第に座に付く。人長進みて膝突など敷かせ。鳴り高しなどいまして次第に召す。笛筆築。本末の歌。和琴。次第に膝突につきてつかうまつる。人長仰するに随ひて笛和琴拍子木にさぶらふ。末の拍子筆築は末につく。和琴は位によらず本の座の上に着す。鈴鹿を賜ふ故どかやよりあひ庭燎本末はて、人長かへり入る。採物はて、韓神の拍子あげて後。人長たちてかなづる。其後勸盃あ

り。韓神はて、又進みて才のこのめす。各座の末より進みて跪きてうへりつゝ、薦枕より千歳早歌などばてぬれば。星を仰せらる。笛筆築音とりて星三首はて、朝倉其駒をうたふ。常の如し。祿を賜ふ。臨時の御神樂は秋の末に行ふなれば。名は臨時なれど。今は定めらる事になりたり。公卿の所作なり。御所作などある時は星を仰せらる。時御簾をうごかさる。御笛なればやがて音取にて仰せらる。も便りあり。臨時御神樂に祿なし。事はてぬれば本座に還御なる。此御神樂は一條院の御時より始まる。隔年又行はる。承保より行はる。年々の事になりけり。壽永の乱よて内侍所西海に渡御なりて。三年をへて事故なく都へ歸り参りし時。三ヶ夜の御神樂ありき。それは別して臨時に行はる。大方神樂のおこりは天照大神の天の岩戸をさして籠り給ひし時。諸神の祈り申されけるに。天鈿目命まさきのかづらを鬘としてひかげを手繼にして謠ひ舞ひ。庭

火をたきし古へより始まる事なれば。我朝の風俗神代の縁起。他に
ことなるべきにや。

増鏡 作者は一條冬良(兼良の子)なりとも云ひ。然らずとも云ふ。後鳥
羽院より後醍醐天皇までの物語体歴史なり。

○ 建久九年正月第一の御子四つになり給ふに。御位を譲り申させ給
ひて。れり給ふ位におはし。ます事十五年なりき。今日明日二十はたば
かりの御よはひにて。いとまだしかるべき御事なれども。萬どころ
せき御有様よりは。中々やすらかに。御幸など御心のまゝならんと
かや。世を知ろし召す事。い今もかはらねばいとめでたし。鳥羽院白
河殿なども修理せさせ給ひて。常に渡り住ませ給へど。猶又水無瀬
といふ處にえもいはず面白き院つくり。まばく通ひおひしまし

つゝ春秋の花紅葉につけても御心ゆく限り世を響かして遊びを
のみ予し給ふ。處からも遙々と川を望める眺望いと面白くなん。元
久の頃詩に歌を合せられしにも。どりわきてこそは。

見渡せば山も霞む水無瀬川夕べの秋と何思ひけん。萱葺の廊
渡殿など遙々とえんにをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧落
されたる石のたゝすまひ。苔深き深山木に枝さしうはしたる庭の
小松も。げにく千世をこめたる霞の洞なり。

謠曲 今こゝに示さんとするは謠曲中の尤すぐれたるものなり。其す
ぐれたる所以は。優美壯嚴の想像凝つて天女と現じ。言語動作人情を失
はずして。おのづから神聖威嚴を有たしむる。是れ一つ。羽衣あれば天上
にのぼるを得。無ければ漁夫にも侮らる。之を人間中の隠微なる羽衣に
比して見れば。妙味言ふばかりなし。是れ二つ。漁夫をば人間に與ふべき

ものに非ずの詞を以て威す能はざるに、春風の空に吹くまでなつかし
やの嘆きを以て感せしめ得たり。人情の妙處とや言はまし。是れ三つ。讀
者を泣らしむるは涙を以てするまでに至らず。而してあはれなる情は
十分に盡したり。是れ四つ。三保松原の春景色を畫がき出だして天女を
遊ばしむる地を興へたり。是れ五つ。

羽衣

漁夫「風早の三穂の浦回を漕ぐ船の浦人騒ぐ波路かな。是は三保の
松原に。白良と申す漁夫よて候ふ。萬里の高山に雲たちまちに起り。
一樓の明月に雨はじめて晴れり。げに長閑なる時しもや。春の景色
松原の波立ち續く朝霞。月も残りの天の原。及びなき身の詠めにも。
心空なる景色か。忘れぬや山路を分けて清見瀉。遙に三保の松原
に。立ちつれいざや通はん。風向ふ雲の浮波たつとみて。釣せで人や
歸らん。待て暫し春ならば。吹くも長閑けき朝風の。松の常盤の聲

みかし。浪は音なき朝なきに。釣人おほき小舟かな。われ三保の松原
に上り。浦の景色を詠むる所に。虚空に花ふり音楽聞え。靈香四方に
薫す。これ唯事と思はぬ所に。是なる松に美しき衣か。れり。よりて
見れば色香たへにして常の衣にあらず。いかさまどりて歸り古き
人にも見せ。家の寶となさばやと存じ候ふ。天女のう其衣はこなた
のにて候ふ。何しにめされ候ふぞ。漁夫。是は拾ひたる衣にて候ふ程
よ。どりて歸り候ふよ。天女。それは天人の羽衣とて。たやすく人間に
興ふべき物にあらず。本の如くにねき給へ。漁夫。とも此衣の御主と
は。さては天人よてましますかや。さもあらば末世の奇特に留めお
き。國の寶となすべきなり。衣を返す事あるまじ。天女。悲しやな羽衣
なくて。は飛行の道も絶え。天上に歸らん事も叶ふまじ。さりては
返したび給へ。漁夫。此御詞をきくよりも。いよく。白良力を得。本よ
り此身は心なき。天の羽衣とり隠し。叶ふまじとて立ちのけば。天女

「今はさながら天人も羽ねなき鳥の如くにて。上らんとすれば衣なし。漁夫地に又住めば下界なり。天女どやあらんかくやあらんと悲しめど。漁夫白良衣を返さねば。天女力及ばず。漁夫せんかたも。地の露の玉鬘かざしの花もしほくと。天人の五衰も。目の前に見えてあさましや。天女天の原ふりさけみれば霞たつ。雲路まどひてゆくへしらすも。地住み馴れし空にいつしか行く雲の羨ましき氣色かな。迦陵頻伽のなれくし。聲今更にわづかなる。鴈金の歸りゆく。天路を開けばなつかしや。千鳥鷗の沖つ浪行くか歸るか春風の空に吹くまでなつかしや。漁夫いかに申し候ふ。御姿を見奉ればあまりに御痛はしく候ふ程に。衣を返し申さうするにて候ふ。天女あらうれしや。こなたへ賜はり候へ。漁夫暫く承り及びたる天人の舞樂。唯今こゝにて奏し給はし。衣を返し申すべし。天女うれしや。さては天上に歸らん事をえたり。此のよつこびに。とてもさらば。人間の御

遊の形見の舞。月宮を廻らす舞曲あり。唯今こゝにて奏しつゝ。世のうき人に傳ふべし。さりながら。衣なくては叶ふまじ。さりどては先づ返し給へ。漁夫いや此衣を返しなば。舞曲をなさで其まゝに。天にや上り給ふべき。天女いや疑ひは人間にあり。天に偽りなき物を。漁夫。あらはづかしや。さらばどて。羽衣を返し與ふれば。天女少女は衣を着しつゝ。霓裳羽衣の曲をなし。漁夫天の羽衣風に和し。天女雨に潤ふ花の袖。漁夫一曲をかなで。天女舞ふとかや。地東遊びの駿河舞。此時や始めなるらん。それ久堅の天といつば。二神出世の古へ。十方世界を定めしに。空は限りもなければ。久堅の空とは名付けたり。天女しかるに。月宮殿のありさま。玉斧の修理とこしなへにして。地。白衣黒衣の天人の。數を三五に分つて。一月夜々の天少女。奉仕をさだめ役をなす。天女われも數ある天少女。地月の桂の身をわけて。假に東の駿河舞。世につたへたる曲とかや。春霞たなびきにけり久

堅の月の桂の花やさくげに花かづら色ゆくは春のしるしかや面
 白や天ならでこゝも妙なり天つ風雲の通路吹きとちよ少女の姿
 しばしとまりて此松原の春の色を三保が崎月清見がた富士の
 雪何れや春の曙たぐひ波も松風も長閑なる浦のありさま其上天
 地は何を隔てん玉垣の内外の神の御末にて月も曇らぬ日の本や
 天女君が代は天の羽衣まれに着て地撫づとも盡さぬ巖ぞと聞く
 も妙なり東歌聲そへて数々の笙笛箏篋孤雲の外に満ちくゝて
 落日の紅の蘇命路の山をうつして緑は浪に浮島が拂ふ嵐に花ふ
 りてげに雪を廻らす白雲の袖ぞ妙なる天女南無歸命月天子本地
 大勢至地東遊びの舞の曲天女或ひは天つみ空の緑の衣地又は春
 立つ霞の衣天女色香も妙なり少女の裳裾地左右左さいう颯々の
 花をかざしの天の羽袖靡くも返すも舞の袖東遊びの数々に其名
 も月の色人は三五夜中の空に又満願真如の影となり御願圓滿國

土成就七寶充滿の寶をふらし國土に是を施し給ふさるほどよ時
 うつゝて天の羽衣浦風にたなびきたなびく三保の松原浮島が雲
 の足高山や富士の高嶺かすかになりて天つみそらの霞にまぎれ
 て失せにけり。

狂言 左の例は栗焼の後段を示すなり前段は主人ありて太郎冠者
 に栗を焼けと言ひ附けたるが餘りうまそうなれば一つ食ひ二つ食ひ
 したるが遂には一つ食うて叱らるゝも二つ食うて叱らるゝも同じ事
 じやとて食ひ盡したる事を作る吝嗇なる主人の下には瞞着に得手た
 る家來あり當世主従の内面を寫し得て頤を解かしむるに足れり。

栗 焼

主人「太郎冠者何と栗焼いたか。太郎冠者「まんまど栗焼致いてご
 ざる。主「でかいたく早う見せい。太郎「先づ私の才覺を聞かせられ

い。お次へ持つて參つて焼かうと存じて御座るが。お次へ參つたらば定めて若子様方の出でさせられて。こゝへも呉れいかしこへもくれいと仰せられませう。進せすは御機嫌がわるうござろう。又數の定まつた物で御座るに依つて。進する事は成りませぬ。處で御臺所へ持つて參つて御座れば。さいはひ火がくわつくと起つて御座つた。所でまんまと焼栗に致いて是へ持つて參りますれば。跡から太郎冠者くと呼ばせらるゝに依つて。後ろを急度見てあれば。毛雪頭にいたゞき。鬢髮に黒き髪もなし。老人と老女と夫婦來り給ひて。我は是れ釜の神三十四人の父母なり。汝栗をくれいよ。汝栗をくれすは。ほしい物を取らすまじ。栗をくれたらば。富貴に守らんと事委しくも宣へば。あら尊とやと思ひて。夫婦に栗を奉る。釜の神の出でさせられてござる。主。夫はめでたい事じや。太郎。其跡から三十四人の公達の出でさせられて。こゝへもくれいかしこへもくれ

いと仰せらるゝ。處で悉く進じて御座る。主。夫婦へ進じたらば公達に進するに及ぶまい物を。太郎。何が思うても見させられい。三十四人の公達の花を飾つて出でされられ。楓のやうな手を出いて。こゝへもくれいかしこへもくれいと仰せらるゝ。物が。何と進せすに置かるゝ。物で御座るぞ。主。進じた物なれば是非に及ばぬ。残つた栗をおこせ。太郎。もう御座りませぬ。主。もうない。太郎。中々。先づ三十四人の公達へ三十四。夫婦へ二つ。まだ四つある筈じや。太郎。それはこなたの御算用がわるうござる。先づ三十四人の公達へ三十七八。夫婦に二つ。もうおざりませぬ。主。やい。總じて算用といふ物は恥づかしいものじや。三十四人の公達へ三十四。夫婦へ二つ。まだ四つある筈じや。太郎。其内に虫の食うたが一つござつた。多い内じや程に虫の食うたもあろう。夫ならば残つた三つの栗をおこせ。太郎。扱はこなたは栗焼の言葉を御存じござらぬか。主。いゝや知らぬ。太郎。言

うて聞かせませう。栗焼く言葉に、逃栗追栗灰紛れとて、三つり失せて候はず、お主どの、御心中、恥づかしう候ふ、ま、何でもない事、すさりをれ、太郎はあ。

草紙文 唐糸草紙は、木曾義仲の郎黨に手塚太郎の娘唐糸といふもの、頼朝に仕へてありけるが、主人義仲の討手立つべき評議を漏れ聞き、頼朝を刺さんとして事未だ果さざるに露見して石の半に囚はれしが、其娘に萬壽と云ふもの母を尋ねて鎌倉に來り、遂に身を忍ばして逢ひ得たる物語なり。

物草太郎は滑稽的の奇人傳にて、又一種の面白みあり。

唐糸草紙の内

頃は三月廿日、鎌倉山の花見とて、をりふし御所には人もなし、萬壽は今宵母の御行方を尋ねて見んとて、御所の内をば忍び出で、

くぎ門を見てあれば、正八幡の御方便かや、折節番衆もなかりけり、門も細目にわいたるなり、萬壽はうれしけれどもよその見る目もあるらん、人のとがめぬ里犬あるやとばかり疑はれ、乳母をば御門の脇に立たせて、我身は内へ尋ね入り、かなたこなたを尋ねけり、あまふきおろす松風の、岩が根騒ぎあたりをば、人やあるかと疑はれ、心を静めてあたりを見る、廿日亥中の雲はれて、月少し見え給ふ、松の一村ある中に、尋ね入りて見てあれば、石の牢こそ見えにけれ、萬壽うれしさに急ぎ立ちより、牢の扉に手をかけて、内のていを聞きけるに、唐糸は人音を聞きつけて、そもくかきにおどづる、誰なるらん、變化のものか、又唐糸が討手にばしむく人か、御使にてましまさば、浮世のひまをあげたしど、かきくさきてぞなかれける。

物草太郎の内

東山道陸奥の末、信濃の國つるまの郡、あたらしの郷と云ふ處よ、不

思議の男一人侍りけり。其名を物草太郎ひちかすと申し候ふ。名を物草太郎と申す事は、國に並びなきほどの物ぐさしなり。たゞし名こそ物草太郎と申せども、家造りの有様人にすぐれてめでたくぞ侍る。四面四町に築地をつき、三方門を立て、東西南北に池を掘り、島をつき、松杉を植ゑ、島より陸地へそり橋をかけ、高欄にぎぼうしをみがき、誠に結構世よこねたり。十二間の遠侍九間の渡り廊下、釣殿、細殿、梅壺桐壺、まがきが壺に至るまで、百種の花を植ゑしゆでん十二間につくり、檜皮ぶきにふかせ、錦を以て天井をはり、桁うつばり垂木の組入れには、銀金を金物にうち、瓔珞の御簾をかけ、馬屋侍所に至るまで、ゆゝしく作り立て、居ばやと、心には思へども、色々事たらねば、唯竹を四本立て、菰をかけて居たりける。雨の降るにも日の照るにも、習はぬ住居して居たり。中略元手なければ商ひせず。物を作らねば食物なし。四五日の内にも起きあがらずふせり居た

りけり。或時情ある人のもどあいきやうの餅を五つ、いかにひだるかるらんとて得させければ、たまさかに待ち得たる事なれば、四つをば一度に食ひ侍り。今一つを心に思ひけるやうは、ありと思ひて食はねば後の頼みあり。無しと思へばひだるくなければ、頼みなし。守らへて有るも頼みなり。いつまでも人の物を得させんまでの待たばやと思ひて、寝ながら胸の上まで遊ばかして、鼻油をひきて口にぬらし。こうべにいたゞき取り遊ぶ程に、すべらかし大道まで、ころびける。其時物草太郎見わたして思ふやう、どりに行き歸らんも物ぐさし、いつの頃にも人の通らぬ事はあらじと、竹の竿をさゝげて、犬鳥のよるを逐ひのけて、三日までも待つゝ人見えす。三日と申すゝ、たゞの人にはあらず、其處の地頭あたらしの左衛門の尉信頼と云ふ人、小鷹狩まじろの鷹をすゑさせて、其勢五六十騎にて通り給ふ。物草太郎これを見て、鎌首もちわげて、のう申し候はんぞ。

れにもちひの候ふ取りてたび候へと申しけれども耳にも聞き入
れずうち通りけり。物草太郎是を見て世間にあれほど物ぐさき人
のいかにして所知所領を知るらん。あの餅を馬よりおりて取りて
傳へん程の事はいとやすき事。世の中に物ぐさきもの我一人と思
へば多くありけるよと。あらうたての殿やとて、なゝゆならすつふ
やき腹を立てにける。

作者作例 其二(歌)

吉田兼好 歌人として再び作例を示さん。

石山に詣づとて曙に逢坂を越えしに。

雲の色にわかれれも行くか逢坂の

關路の花のあけばのゝそら

逢坂の關ふきこゆる風の上に

ゆくへも知らずちる櫻かな

或人よいぎなはれて四國見に渡りし時。波風のあらかりし事
思ひ出でゝ。

世の中をわたりくらべて今ぞしる

あはの鳴門は波風もなし

世をのがれて木曾路といふ處を過ぎしに。

思ひたつ木曾の麻衣あさくのみ

染めてやむべき袖の色か

春 月

さやけさはほかにのみこそ聞ゆなれ

細谷川の春のよのつき

頼阿法師 下野守光貞の子にて在俗の時は二階堂下總守藤原貞宗

と云はれし人なり。比叡山にて出家し泰尋と名づけしが、高野山に住みて後頼阿と改めたり。その後また京都に住めり。藤原爲世に就きて歌を學びしが、兼好淨辨慶運と共に和歌の四天王と呼ばれしと云ふ。頼阿の歌体光嚴天皇の御心に叶ひて北朝に召され、足利尊氏にも度々招かれたり。文中元年八十四歳にて没す。家集を草庵集と云ひ、また井蛙抄の著あり。歌は巧を極めて幽玄なるもの多く、後世に草庵体とも呼ばれて一派を爲す程なり。

朝梅

梅が香のうつるばかりになりはて、

あくれば袖に月も残らず

獨吟百首に。

わけやすき名残をかねて思ふには

いづるもをしき夏の夜の月

入道二品親王家五十首歌に。雉

月いなほ霞みて残るかたをかの

朝のはらに雉子なくなり

等持院贈左大臣家三首に。野月

武藏野や雲をばはらふ秋風に

露の残りて月ぞやせるれる

聖護院五十首に。杉雪

明けぬるか杉のむら立見えそめて

をのへの雪に雲ぞわかるゝ

正徹 京都東福寺の書記たりしかば徹書記と呼ばれたり。清巖とも號す。後花園天皇の長祿三年没す。家集を草根集と云ふ。風体は一ふしあれども高からぬ趣あり。

康正元年八月廿八日。此四年の程將軍家にて講せし光源氏の物語談義去んぬる廿二日結願申したるよろこびとて草庵よ人々來て當座百首の歌よまれし中に瀉千鳥

浦千鳥今ぞ沙干のかたばかり

つたへし道の光を分しる

九月廿五日紅葉の盛に人々ともなひて東山のほとり見ありきて。靈山に行福寺と云ふ道場にて。五十首の題を探りて歌よみし中に懷舊

ふりはてんしるしを庭に残すとも

あはれむかしと見ん人やなき

三玉集 當期末の歌風を代表して世に珍重せられしものなれば。衰運中の一例に供せんも無益ならじ。三玉とは何ぞ後柏原天皇の拍玉集

西三條實隆の雪玉集。冷泉政爲の碧玉集。これなり。中にも雪玉行はれて鳥丸光雄口授にも。雪玉集隨分當流の姿なり。ちと新しき趣なり。など云へり。實隆は正二位内大臣に至り。天文六年八十三歳にて薨せし人なり。さればこゝには實隆一人の作例をあげて三玉の代表とし。及ぼして當期末歌風の代表たらしめんとす。

沼春草

春やまだ淺香の沼のみどもりに

けふこそ草もかつみどりなれ

風前歸雁

つばさにや山風そへていとぐらん

花におもはぬ雁のかへるさ

樵路日暮

あはれにも暮れにけるかな重からぬ

薪なりともどほき山路を

寄歌述懐

色につき花になすなよさてのみぞ

世にうもれ木の言の葉の道

近古結論

余はこゝに謝す。近古文學史は言文二体の作例を與へたる事を、かの保元平治太平記の如く、新古今新葉集の如きは、雅言としての好材料なりき。かの狂言や職人書歌合詞書の如く、其歌合の歌の如きは、俗言としての好材料なりき。

余は再び謝す。近古文學史は言文親睦の作例を與へたるを、彼謠曲の如く草紙の如きは、其好材料なりき。

余は更に謝す。中古文一轉して一種の光ある近古文を成したるを、撰集

抄徒然草正統記の類これが好作例なりき。説明解釋を主とせし一條兼良の質素淡泊文も、猶此中に加はりて好模範を遺しゝなり。

承久の亂は承久記を生じ、南北朝の争は太平記を生じ、嘉吉應仁の變は嘉吉記應仁記を生じ、戰國の末に信長記太閤記を生ず。文また兵氣軍法と共に、人情時勢と共に、亂れつゝ進みつゝ動いて止まざるを見る。歌道ひとり新古今に止まり新葉集に盡きて、又振はざるは哀しむべきに似たれど、此盡きたるは作者の盡きたるに非ずして、暫く上手の跡を隠したるなれば、燈火いまだ滅するに至らず。況んや之に代はるに言文一致体の出で、區域を廣め、民間の用を爲さんとするは、亦一の活動現象たりき。況んや短歌衰へて謠曲之に代はり興る、更に遺憾あるべしや、は古人崇拜の時代のや、去りて、門流傳授の崇拜時代つぎて來る。時運ここに至りて一變せるを見るのみ。

第五編 近世

時代の區域

近世は二千二百四十年代より始まりて二千五百二十年代に終る。此内後陽成天皇の天正頃より櫻町天皇の延享頃までを第一期とす。謂はゆる元祿時代を其中央に含むなり。桃園天皇の寛延頃より維新前までを第二期とす。明和寛政天保の年號之を代表すべし。

第一	第二
四二	二二
り二	四七
年よ	年よ
靈元	後陽成
天寛	慶長
和文	天正文祿
貞延	長文祿
享寶	慶長元
(綱吉)	和(家光)
東	明
山	正寛永
貞寛	後西院
元元	明曆萬治
祿祿	寛文

第一期

總論

徳川家康天下を一統して江戸幕府を開きしより、大に心を學問に留め、藤原惺窩名は肅、朱子學者なり。元和五年五十九歳にて没すを聘し、林道

期二第	期
二五	二年
二六	まで
年ま	中御門
で	享保正徳
光	寶永正徳
仁	享保正徳
孝	元文寛保
天文化	(家重)
保弘化	後櫻町
(家慶)	明和
弘化嘉永	寛和
永安安政	寛和
萬延	寛和
(家定)	寛和
家茂	寛和

春(羅山)と號す。明曆三年七十五歳にて没す。を用ひて先づ漢學講習の業を起したり。次に多年兵亂の紛れに散り失はれし古書を搜索する事に盡力せしかば。追々にあつまりて學者を利し。遂に之を上木する者の陸續出で來りしは。慶長を以て始めとするなり。

道春は京都に一の學校を建てんと請ひ。家康も之を認可したりしに。大坂陣の騒ぎ出で來て。其事成らずして止みぬ。依りて道春は江戸の忍岡に弘文館と云ふを私設して。聊か學校の形を學びたり。抑も我國學校を置くは中古の初よりは大學國學の官立あり。勸學學館等の私設あり。近古には下野に足利學校(貞和年中足利基氏の興立)武藏に金澤文庫(北條顯時の建設)の二校あるのみなりしが。中古のは既に絶え近古のは邊土の地にあり。依りて今之を都會に起して亂世の餘民を文學德行の士たらしめんとの意なるべし。是より道春は世襲徳川氏の文學を司る家となり。天下は治世となるまゝに。文教漸く行はれしが。五代將軍綱吉は大

に儒教の獎勵者なりしかば。道春の孫風岡に命じて彼弘文館を湯島に移し徳川氏の管轄に歸せしむ。之を昌平黉と云ふ。

今や泰平の氣象は六十餘州を包み。學海の針路に遮るもの無ければ。諸藩も之に習ひて學校を設け。儒者を聘し。教育及ばざる隈も無し。其將と爲つて旗を京都に揚ぐるものには。山崎闇齋。貝原益軒。中村惕齋あり。江戸の陣には木下順庵。新井白石。室鳩巢あり。水戸の砦には明國の歸化人朱舜水と。安積澹泊あり。何れも謂はゆる朱子學を祖述す。此に於て伊藤仁齋は更に一旗を京都に翻して復古學を唱へ。朱子學に反對の陣を張る。初は朱子學派たりし荻生徂徠。また其非を悟りて新に古學の一門を江戸に開き。遂に仁齋に聲援せしかば。軍勢いよく振ふ。

物の極端に走る時は必ず僻す。中正の文字を掲げて其間に現はるゝものあるは。社會古今の通習なり。此に於て折衷學と云ふもの起る。蓋し古學の説をも容れ。朱子學の説をも捨てずして。一意孔子を祖述するよ在

るものなり。其勢力ありしは、井上金峨、山本北山、太田錦城これなり。漢學此くの如く隆盛を極めたり。其極は再びこゝに支那崇拜の學風を現出し、聖人あるを知つて朝廷あるを知らざる腐儒曲學の徒を出ださんとす。山崎闇齋或時門人を試むるに、堯舜之が大將と爲り、孔孟之が副將と爲り。今假に我國に向ふとせば、其所置如何と。門人互に顔見せて答ふる所を知らざる有様なりき。荻生徂徠は東夷之民と自稱せし事もありき。以て學者方針の向ふ所を知るべし。斯かるあさましき學風を作りなしたるものは抑も誰ぞ。徳川氏の政畧と王室の衰微と其原因たるべけれど、抑亦我國の事を後にして彼國の書にのみ親密なりしが爲め。知らずく此に至れるのみ。後の外國學するもの深く戒めざる可からず。然れども泰平の光は獨り漢學をのみ生育するに止まらずして、彼學者中よりも道春闇齋白石の如き國學兼修の博士を出だし、近古の遺物たる歌人連歌師中より國學専門の博士を出だし。中にも北村季吟は其録

録たるものなりしかば、元祿二年幕府に召し出だされ、歌學を以て仕ふる家と爲れり。民間には大坂に僧の契沖出で、假名遣の復古を唱へ、亂れたる歌道、語學を一洗せんとせしかば、水戸の徳川光圀卿は家臣安藤爲章を入門せしめて其説を用ひ、大に國學擴張の旗を揚げ、大日本史禮儀類典の書出でしより、尊王愛國の風始めて振ひ、元祿の天地は又春の光もて満たされんとす。又一方には井原西鶴、近松門左衛門ありて小説院本を著はし、芭蕉出でて俳諧を起しなせしかば、元祿年中に至つて謂はゆる徳川氏の文學競ひ興り、幾百年間長暗冥の内に失はれるたる光明を、こゝに始めて發するを得たり。然れども漢學は士人社會を專有して、いまだ民間に入らず。小説院本は女子と平民とを專有して、いまだ士人社會に容れられず。國學獨り其間に在つて、或は士人を説き、或は女子平民を説くに似たれ

を。猶その功を奏せずして學派割據の姿を爲したり。而して其文章。漢學者には漢文の語氣あり。國學者には古文の語氣あり。小説院本家には卑俗の語氣ありて。互に相容れられざる事なほ彼學派と伴なひて離れず。今諸君は何れを取らんとするか。僻する文章もどより學ぶべからざれども。當時の言語を本として摸倣に流れざりし小説院本家。分けては近古の草紙より沿革し來りし通俗文章の作者こそ。元祿文學の代表者とは謂ふ可きなれ。

漢文体

麻の如く亂れつる天下のこゝに始めて一統し。士民業に安んじ文學興隆の運には達したれど。各自めいゝの生育に放任して。甲學と乙學との間に連絡なく。従つて國語國文の定義いまだ定まらざりしかば。謂はゆる勝手自由の方法にまかせて思想を發言し。文章を書きたるなり。先

づ最初に興りたる漢學者流の文體は如何多くは。

韓柳歐蘇は文章の大宗たり。古今文章に於ては一人も非議するものあるを聞かず。されば明朝に至り詞臣文士多く出で。文章世に盛なりしが。劉基。宋濂。李夢陽。何景明が徒。名を一時に擅にし。大家と稱せしかども。韓柳歐蘇が文に於ては。一言も唯黃を下す書なし。(室鳩巢) 善と福とは同類なり。惡と禍とは同類なり。同氣相求め同類相應ず。善を爲せば福あり。惡を爲せば禍あり。同氣相感する自然の理なり。

(太田錦城)

の類なり。是れ求めて漢文體を學ばんとせしには非ざれど。朝暮漢文にのみ目馴れて。おのづから直譯文體を爲したるなり。然れども。之を今日の漢文體に比ぶる時は。猶多少語勢接續の間に國文めきたる處あるを見出ださん。是れ足利時代文學の權全く僧徒の手に落ち。和漢調和して漢文の訓讀法もおのづから一定の國語々勢を爲し來りしに事起りて。

林道春徳川氏の始めに四書の訓點を附し、世の漢文讀法を定めたるが致すところに困らざるはあらず。故に當期漢文者流の文、おのづから國語々勢を失はずして、維新前後のてにをばも無く過去未來の時をも用ひざる冷澹文章に勝るものありしなり。さればこそ漢文体の内に和文体を含み、和文体又擬せんとして漢文語氣を帶ぶる物も出で來て、一派の文体を爲さんとするなれ。

庚戌の歲四月十七日駒野を發して小萩を過ぎ脇山村に至る。行くこと二里許にして中村と云ふ地に至るに山川紛糾なり、(伊藤東涯)若かりし時より學びの窓に年を経るかひありて、程朱の道又從ひて鄒魯の風を尋ね、韓歐が文を好みて邯鄲の歩を學ぶにぞ、老の寐覺も慰みぬべき。(室鳩巢)の類、以て見るべし。

和文体

次に謂はゆる和學者國學者の文体は如何、多くは、

春夏秋冬の時につけて紅葉や花の色々にうつりかはるけしきすべていひつくすべくもあらぬを都に近くて心あらん人よ見せましかば、漢のやまどの言の葉もしげく、末の世かけてかたりつぎいひつぎゆかん情も深かるべきを、天さかる鄙の長路を隔て、漕ぎくる舟のたよりならでは、たやすく行きかふべくもなきよや、古き歌枕などにもかひなくもれて、埋木の人知れぬ所となりはてたるに、云々。(季吟)

時はしはすの春の隣ちから、此山里なごこそあれ、大かたの世は送り迎ふべき營みに入日も招かまほしげなるに、おもほえず難波わたりより能因も後を恐るべきをのこせうそとするにつけて、柿本のあそみの影あらたにうける、是が開眼して石見の海の深き心の

根を生へしゆよと仰す。見れば人の咎むる香にもぞしむとよやわらん。梅があたり遠く雪ふりさけてそれとも見えすとすじたる所。その人今し其花香を含めるに似たり。(契沖)

の類これなり。今之を前の漢文体に比べ見れば。彼は簡潔を主とし。此は冗長に傾く。簡潔は文に尊ぶところなれども。何事も簡潔のみにては寫しがたし。冗長は文に嫌ふところなれども。此精密の語勢必ずしも不用なるに非ず。おのゝ其長を以て分業せし有様なりき。抑も此和文体を元祿文學の標準として定むべきか。曰く然らず。此文体決して徳川時代に發達せる文体は非ず。徳川時代の思想感情を發表せるもの非ずして。中古の摸品と近古の遺物と止まればなり。故に天地と共に古今を分たざる花鳥風月の詠吟は適し。古事を語り古書を解くは適したれど。目前の人界たる現在の現象を記すは不便なりしかば。單に専門家一流の間は縮まりつゝ。未だ廣大の天地は膨脹するを得ざりき。而して國

語國文の流行を未來に期し。外國文体は打ち勝つて國語國文の文体を他年よ定めんとする一脈の春風なり。此中よ含まれ居たりしなり。

俗文体

されば漢文体の漢學者を喜ばせ。和文体の和學者を喜ばすのみよて。未だ女流民間の俗界を満足さするは足らず。俗界の男女の長あくびして分らぬ説法を聞く思なき能はず。此よ於て文學界の門徒宗おこる。さて其言ふどころの如何。東海道名所記の。

いとほしき子よの旅をさせよと云ふ事あり。萬事思ひしるもの旅よまさる事なし。鄙の永路を行き過ぐるもの。物うき事嬉しき事。腹の立つ事面白き事。あはれなる事恐ろしき事。あふなき事をかき事。とりくさまゝなり。人の心も言葉つきも。國より所よりおのれゝの生れつき。花車なもわりいやしきもわり。それのみ

ならず道すがらよ。海川山坂橋平地石原沙原細道畔道追分なん
 どとて是あり道の助よ大雪よ山越し大水よ川越深き川よ渡し
 船乗りかけ又駄賃馬或は歩よて行く人の爲からしりの馬駕乗物
 或は馬のなき時のかち荷物のためすけもあり知らぬ道よ案内者
 あり旅屋の遠き所よ店屋の餅團子茶屋の焼餅其外在所より家
 よよりて國の名物酒肴賣色々あり一日路すぎて暮方よ旅屋
 の宿泊々これあり是を昔の驛館とだよいへば人恐れて立ちのき
 けり今の世までも驛馬々々といへば道行く人も傍へ立ちのくは
 此事よりも云ひつたへたる言葉とかや。

とて誰にでも分るやうに旅行の案内を爲し武藏鎧は。

我もくど家財雜具をもち運び西本願寺の門前におろしおきて
 休みける所に辻風おびたしく吹きまきて當寺の本堂より始め
 て數ヶ所の寺々同時にどつと焼けたら山の如く積みあげたる道

具に火ももえ付きしかば集まりゐたりし諸人あわてふためき命
 をたすからんとて井のもとに飛び入り溝の中に逃げ入りける程
 に下なるは水に溺れ中なるは共におされ上なるは火にやかれこ
 こにて死するもの四百五十餘人なりさて又始め通町の火は傳馬
 町に焼け来る數万の貴賤此よしを見てのきわしよしとて車長持
 を引きつれて淺草をさしてゆくもの幾千百とも數しらず人の泣
 く聲車の軸音焼け崩るゝ音に打ちそへてさながら百千のいかづ
 ちの鳴り落つるもかくやと覺えておびたしども云ふばかりな
 し親は子を失ひ子は又親におくれておしあひもみあひせきあふ
 程に或は人よ踏み殺され或は車にしかれ疵をかうむり半死半生
 になりてをめきさけふもの又其數をしらず。

とて平語もて大火の有様をしるし奈良土産返答と云ふ書には。

(土産)總じて此小袖會我と云ふ謠に小袖の事なし何と思ひて此名

を付けたりけるぞ。

〔返答〕曾我物語もまだ見られぬか。此謠は曾我物語七の卷小袖乞とある段より作りたるなれば、其本據を忘れず小袖曾我と名づけたり。物語と謠と引きあはせてお見やれ。言葉つゞき文句の心、そつとも違はぬなり。まだ大事のことを申して聞かせう。總じて經論書籍の外題を付くるには、七種の立題といふ事がありて、おぬしの夢にも知らぬ子細ある事なり。合點ゆかすは習ひゆされよ。七種立題の事台家四教集註といふものにあるぞ。

とて尤通俗に論破したる語勢。あたかも其人の話を聞くが如く。今日の新聞雜報とも云ひつべき文体なり。是ぞ徳川文學の上流より下流に及びたるにも拘りらず。元祿文章の民間より先づ起りし有様なる。然れども文學の中央集權なくして、諸學派互に轢りあふ世の中なりしかば、多くは學者社會も容れられず、猶かの和文漢文兩体に勢力を占められた

るは、文學再興年まだ深からざりしに由るのみ。

淨瑠璃

足利時代には謠曲出で能起りたり。而して幕府の式樂と爲り。高尙嚴正の歌曲として士人の上へ行はれたり。今や民間の俗曲と爲りて普通近易の作おこるも又時勢なり。

後陽成天皇の頃に小野お通と云ひし女あり。矢矧長者の娘淨瑠璃御前と牛若丸の事を十二段の物語に作り、前期に行はれたる草紙の面目を一新したりしが、遂に琵琶琴等の樂器に合はされ、京都四條川原にて歌舞として興行せらるゝ。又至りしが、芝居の起原なりと云ふ。是より此草紙もてはやされて謠曲時代を一變し、遂に戯曲を代表するも淨瑠璃の文字を以てし。彼謠曲の長くとも二段を出でざる短演戯に代ふるに、此數段の長演戯を以てするに至らしめしは、恰も其時を得たるお通の才

筆。方ありしと謂ふべし。其文のやさしくおだやかにして、前期の草紙を
壓するに足らずと雖ども、卒先して當時の人情を満足せしめたる功は、
豈彼等の下に在らんや。其文中に。

彌生半の頃なるに。櫻梅桃李の春の花。木々の梢に咲き亂れ。大度嶺
の梅の花しげみ。が中の花さかりも。かくやと思ひ知られたり。御曹
司は木の本に立ち忍び。散りゆく花を左右の袂にかけとめて。古き
詩歌をながめて立ち給ふ。

げにや九重の塔高しと申せども。燕が飛べば下にあり。劍の刃は早
きとて。岩の角をば削らぬもの。竹の林が高きとて。切利天への登ら
ぬもの。參河にかけし八橋の蜘蛛手よものや思ふらん。

などあるを見て。或は謠曲より來り。或は他の草紙より導かれ來し体な
るを知るべし。お通或は織田信長の侍女なりとも。豊臣秀吉に仕へたり
とも云ひ。之に始めて節附せしは。岩船檢校なりとも。花田檢校なりとも。

云ひて。諸説一定せず。

元祿の頃に至り近松門左衛門出で、彼十二段草子を擴張し謠曲を一
變し。謂はゆる淨瑠璃院本なるものを大成せり。一は女性的の文に起原
し。一は男性的の文に起原し。以て此盛大なる一戯曲を開きたり。今其作
なる源氏冷泉節に。

見わたせば松の葉白き石橋山。いくせ氷りし雪ならん。

と云ふ文句もて起したるは謠曲を學びし如く。

皆白鷺と山の井の氷の鏡とおのれさへ。影に驚く羽たゞきや。はつ
と拂へを色々に。驚も鳥もあらはれて。雪に畫をかく風情かや。

の口調は。十二段にも似たり。然れども全体より言へば新文体新結構に
して。純然たる元祿文學なり。諺に曰はずや。婦女子の喜ぶもの三つあり。
薩摩芋に淨瑠璃に因果ばなしと。其斯かる愛敬を受くるに至りし普通
文學の起原は。抑もこゝにあるなり。世に芝居改良を説くものあれども。

遂に其實効を見ずして猶舊作の粹を抜くに止まるもの何ぞ。是れ其近松流の結構文体後世を照らして、光いまだ滅せざるものに非ずや。徳川氏の文學不揃なるにもせよ、割據孤立なるにもせよ、一方より言へば隆盛の極に達したるものと稱讃せざるべからず。

和歌

和歌の見るべき無きは此時代なるべし。足利時代の餘弊を受けて氣力なく、摸範を中古以上に取りだけの學問なく、唯師傳と自流との三十一文字が縷々として病体の上に脈動し居たるのみ、彼鎌倉紀行澤庵和尚の。

波あらしき六浦の浦の海士の小屋

園ふとすれどまばらなりけり

朝夕に波よせ来る烏帽子島

沖よりあらし風折やこれ

身延記行(元政法師)の。

せめて世をのがれしかひの身延山

すむらん月を尋ねてや見ん

此世にて心にかゝる雲もなし

富士の高嶺もあくまでに見つ

なぞを見れば、舊來の歌詞と平話との混化物は過ぎざる様の大凡は知られなん。然れども今や北村季吟出で、中古の歌集物語に丁寧懇篤なる註解を加へ、元祿文學の光を與へしかば、是より古書を読む事かたからずなりて、遂に歌學復古の運を導く糸口は既に開けたり。

俳諧

和歌は變じて連歌と爲り、連歌變じて俳諧と爲る。俳諧また古今集の俳

諧に非ずして、連歌を俗語もて連ねたるもの是なり。

時鳥かく豊かには臥すものか(甲者)

せめては切つて垣根卯の花(乙者)

風ふるゝ手蕎麥一種を我宿に(丙者)

雲たゝんでは廻文の状(丁者)

取り出だす火打附竹峯の月(戊者)

鍋墨けづる夕暮の秋(己者)

などの如く、初句は「ゆたかに」に「蚊」を含ませたる故に「せめて」と受け。二句の「切つて」を三句の「蕎麥」よて受け、「風」を「雲」に、「廻文」を「火打附竹」に、「月」を「夕暮の秋」に受けさせたるの類。謂ひゆる述の莖を折りたる如くに、意味も言葉も續きたるやうで切れたるやうで、以心傳心と云ふ姿のものとは爲りにけり。是また俗文体の起ると共に伴なはれたる現象の一つなり。俳諧の初句十七字を名づけて發句と云ふ。之を單に取り放して感情思

想を寫す道具とする事も盛に起りぬ。

女郎花たといいははの内侍かな(季吟)

鯛は花は見ぬ人もあり今日の月(西鶴)

の類これなり。

抑も此俳諧と云ひ發句と云ふもの、近古の末期に端緒を開き、宗祇以下の人々出で、作例をも遺したれど其大成を得しは、元祿文學の興隆と時代を同じうして、芭蕉の出でたるに在り。此に於て平民文學の振はんとする機械はいよゝ／＼せまりぬ。

作者作例 其一(文)

おあん物語 慶長頭の人記せるものなるが有りのみ、の文に却つて無量の味あるを覺ゆ。おあんは作者の名に非ずして、庵主の尼を尊稱する御庵の意ならんと云ふ。

○
 子供集まりて。おわん様昔物語なされませといへば。おれが親父は山田玄曆というて石田治部少輔殿に奉公し。近江の彦根又居られたが。その後治部殿御謀反の時。美濃の國大垣の城へこもりて。我々皆々一所又御城にゐておじやつたが。不思議な事がおじやつた。夜なく九つ時分に。たれどもなく男女三十人程の聲にて。田中兵部どの、う。田中兵部どの、うとをめぐりて。其あとにてわつというて泣く聲がよなくしておじやつた。おどまじやく、恐ろしうおじやつた。うの後家康様よりせめ衆大勢城へむはれて。いくさが夜晝おじやつたの。其寄手の大將は田中兵部殿と申すでおじやる。石火矢を打つ時は城の近所を觸れ廻りておじやつた。それはなせなりや。石火矢を打てば櫓もゆるく動き。地もさけるやうにすさまじいさかいに。氣の弱き婦人などは即時に目をまはして難義した。

其故に前方にふれておいた。其ふれがあれば光りものがして。雷の鳴るをまつやうな心しておじやつた。始めのはどは生きた心地もなく。唯物恐ろしや。こはやとばかり我人思うたが。後々は何ともおじやる物じやない。我々母人も其外家中の内儀達も。皆々天守に居て鐵炮玉をいきました。又味方へ取つた首を天守へ集められて。それを札をつけて覚えおきさいく首におはぐるを付けておじやる。それはなせなりや。むかしはおはぐる首はよき人として賞翫した。それ故白齒の首はおはぐるつけて給はれとたのまれておじやつたが。首もこはいものではあらぬ。その首どもの血くさき中に寐た事でおじやつた。或る日よせ手より鐵炮打ちかけ。もはや今日は城も落ち候はんと申す。殊の外城のうちさわいだ事でおじやつた。其所へおとな來つて。敵かげなくしりました。もはやおさわぎなされな。しづまり給へくといふ所へ。鐵炮玉來りて我ら第十四

歳になりしものに當りて其まゝひりくとして死んでおじやつた。扱々むごい事を見ておじやつたのう。其日わが親父の持口へ矢ふみ來りて。立曆事は家康様御手習御師匠申された。わけのあるものじや程に。城をのがれたくは御たすけ有るべし。何方へなりとも落ち候へ。路次のわづらひも候ふまじ。諸手へ仰せ置いたとの御事でおじやつた。城は翌の日中攻め落さるゝとて。皆々力を落して。我等も明日は失はれ候はんと心細くなつておじやつた。親父ひそかに天守へ參られて此方へ來いとて。母人我等をも連れて。北の堀わきより階子かけて。釣繩にて下へ釣りさげ。扱たらひに乗りて堀をむかうへ渡りておじやつた。其人數は親達ふたり。童とおとな四人ばかり。其外家來はるのまゝにておじやつた。城をはなれ五六町ほど北へ行きし時。母人俄に腹いたみて娘を生み給うた。おとな其まま田の水にて産湯つかひ。引き上げてつまにつゝみ。母人をば親父

かたへかけて。青野が原の方へおちておじやつた。こはい事でおじやつたのう。昔まつかふ南無阿彌陀く。

松永貞徳 逍遙軒と號し和歌連歌を能くす。或時京都三條通の大道にて徒然草を講せしに。都下の一豪家何がし。其雄辯に服して地面を贈り興へし物語もあり。晩年盲目と爲りしが侍童三人を置きて。甲を珍重。乙を満足。丙を祝着と名づけしといふ。滑稽人たりし風彩想ふべし。堯然親王より大佛殿の南に地面を賜はりて。自ら菓の木を植ゑ柿園と名づけし事もありしとぞ。承應二年八十三歳にて没す。左の文は。當時流行の古文模擬たる和文体の一斑を知るに足らん。

石山詣之記

壬子の秋石山寺の御戸開かれ給ふとて。京田舎の女童まで皆詣で侍ると聞きて。伴なふ中のわかきとちはたへすとそいのかされけ

れば自らもたへずそのかされてまだ曉より出侍るなり。月下の五日なれば月は鎌を磨ぎたてたる様にきら／＼と山の端近くさし出でければ夜寒の風も忘れてたゞしの熊手もたゆきまでうげゆくにやう／＼明け行くにや。寺の鐘もさやかに關の此方響けば遠近人の聲あどさきにさわぎて國津御神の浦もものさびず舟にあるも多かめり。日の内に歸る都なれども山一つ隔つればはや心もどなくかへりみるに遙かなる旅に趣く人もこの中にはあゝらんと知らぬ別れまで悲しまれて坐るに涙ぐまれぬ暮れ易き頃なれの京をば己がじゝ出で勢田の邊にて行きあはんと兼て契りしに先づつ人は後るゝを待ちわびて舟にや乗りけん。橋のあたりには見えすといへばさての跡よりやとてまばしおろさせて休らふ内に湖水漫々風巻浪石山嶮々徑凌巖といふ句をまうけぬ。日もたければ知人どもの言ふにこれより石山へは一節の道な

ればまがふ可き方なし。先づ参り給ひてあれにて待ち給へかしといふを實にもと思ひて行くに道も去りあへぬ人の中に求むれども得ず石山に着きてからうじて待ち出でぬ。年経てあへるやうに互にうれしくしか／＼と語りて登るによそねしまのこゝだくに立てるを見てさてのこれによりて山の名は負ひけらしと。人皆知りぬ。先づ佛を拜み奉らんと前に行くに堂は皆近き年秀頼公の御母堂の後の世の御願の爲め作られたると見えて新らしく清らなるに昔覺ゆる月の御顔の光りあひたるいと尊しうしろなる山のとをかひより海を見れば勢田の長橋も目の前に三かみの山もほそちかく唯一所にたゆたふ舟は釣するよやあらん。行きかふは矢走の渡舟にやあらむ。北へ行くもあり南に棹すもあり。誠に昔の千枝常則といふどもこれを寫せと云はし思ひ煩ひぬべし。須磨明石の浦は未だ見ねども。何がしの物語も此面影より思ひたちて書き

そめたりと聞き傳へ侍れば。さもやと思ひ遣られ侍り。何れもすきの人どもなれば。猶これより高き所にて見むとて。遙々と各よち登るに。かの長能が峯にこもれる秋の夜の月とよめるも此峯の事にや。山はいつの世よりいつの世までと云ふことも知らず。同じ姿にて侍る可ければ。人は皆うつり變りて名のみ残れり。今日もまた明日の昔なるべし。それより源氏の間と云ふ所ありとて。皆人こぐるを見れば。本尊のうしろに方丈ばかりの所侍り。紫ども式部ともえも知らぬものどもの拜めば拜む事とて。數珠すりまはるもをかし。こゝにて只お過ぎんもさすがなれども。人繁ければ側なる坊に宿りて疊紙取り出で、書き付けゝる。

海近くむかふすゞりの石山や實に名も高き筆のあどかな友とす。るは皆唐の歌に馴れたる人々なれば。大和歌はかゝらで思ふ事作られけるも。様かゝりてをかし。

淺井了意 既に紹介せし東海道名所記の作者なり。松雲。如備子。鷹水子などの號あり。京都の黒谷に住む。或は僧なりしとも云ふ。元祿六年に没せり。著述には賞華吟。浮世物語。江戸名所記。鎌倉名所記。京雀。はなひ草。大全。武家根元。可笑記。北條九代記。犬はりこ。おどぎぼうこ。三井寺物語。葛城物語。安倍晴明物語などあり。

○

(東海道名所記)

島田が原。今は新田になりて。大炊川の水を堰き入れて耕作をつとむ。右のかた一町ばかりに島田が淵あり。島田より金谷へ一里。男申しけるはいざやまゝとまり侍らんといふ。樂阿彌申すやう。旅なれぬと云ふ。此事なるべし。此先に大堰川あり。駿河と遠江の境なり。又かの世此世のさかひをも見るほどの大河なり。南風には水まさり。西風には水おつる。明日香川にはあらぬと。大雨ふれば淵

瀬かはる事度々にて定まらず。或は東の山の岸を流れて島田の驛を河中になす事もあり。或は西の方に流れて金谷の山際にそふ事もあり。又は一節の大河となりて大木を流し大石をころばかすこともあり。又はあまたに分れて河原のねもて一里ばかりが間に幾筋も流るゝ時あり。古より舟も橋も渡す事かなはず。往來の旅客人も馬も河の瀬を知らず。下れば金谷に泊り。上れば島田にとまりて水のおつるを相待つなり。水高ければ漲りて瀬。底には大石流れこけて若しも渡りかゝる人は。足を打たれ水に溺れて死する者も多し。濡鼠の如くになりてやうく向ひの岸にあがるもあり。島田のもの川ぞしよ出づる。我家は水に漂ひながるれども。旅人の袋をむさぼる故に大水を喜ぶ。かの炭を賣る翁がおのが衣は薄けれども。年の寒さを喜ぶが如し。近頃は島田と金谷の馬かた川ぞしよ一味して浅き瀬をかくし。深き所を通り。わざとふしまるびなんど

して腰につくほどの水も廿疋三十疋の錢をとる。まして水の深き時は其賃限りなし。水のある時分ならば島田金谷に宿をと。川ぞしの直段をきはむべし。川端に行きかゝりては殊の外に賃高し。況んや出家町人伊勢まゐりをばなほも直段高くとる也。此川にては功者あるべし。まこと大水ならば。宿に逗留すべし。然るに此ほど打續きて雨ふらず。水は定めて少なかるべし。今夜島田に泊りて大河を前にかゝへん事然るべからず。もし川上に雨ふり夜の間に水まさらば悔しうらむ。道はたゞ一里なり。金谷に越えて泊り給へ草臥給はば馬にめせとて。島田にて馬をかり。男をばうちのせ。樂阿彌は歩にて行く。さても此川に鮎の魚あり。水の浅きときは鶴繩を川上より引きてさがる。繩にあたりてはねあがる鮎を大さでをうつて中よてすくふ。津の國の鼓が瀧にて鮎を汲むがごとし。かやうにうち物語りて川端に行きて見れば。思ひの外に水多し。されども

馬方心得たるものにて瀬を尋ねてわたす。樂阿彌もからしりの馬はあふなきものぞや。わきひらを見れば目のまふものぞ。目をふさぎよく鞍つばにどりつき給へと。男に力をそへて。歩意々々というて渡るうちにいつの間にか樂阿彌房は行方しらすなりぬ。男は馬に渡され馬子諸共に岸にあがりて。これはそも御房の流れ給ひけり。とて川下をみれば。一町ばかりの程に何とは知らず。黒きもの浮きぬ沈みぬ見えつ隠れつして。やうく岸の上にはひあがられたるをみれば。樂阿彌なり。いかにといへば。さればこそ。水底に流るゝ石に躓き。ころりどこけたれども。水心を知り侍れば。立ち泳ぎ臥し泳ぎしてあがりぬ。とてぬれかたびらをしぼり。章魚からげに裾をからげて。金谷をさしてゆく。男何とやらん物あんど姿なり。何ぞ落し給ふかと問へば。島田よりこゝまでかゝれどもつひは歌ぶくろの緒がとけぬと云ふ。馬かた聞きて。島田の事なれば髪をゆうたる

事をよみたまへかしといふ。これに心つきて。

はたごやの女はちりのつくもがみせめて島田にもふよしもがな。とよみたりげにく。春元の發句に。

名よゆふやげにも島田の抑髪。といへる面影侍るとて。たどりたどり男の乗りたる馬のしりにつきてゆく。ぐみの木多くあり。秋の末には往來の旅人みな枝折にして行く。

北村季吟 號を拾穂軒とも云ふ。近江の人なり。京都の新玉津島神社の祠官と爲り。松永貞徳に和歌を學びしが。出藍の名あり。元祿二年幕府よ召し出だされて江戸に移住し。歌學所と爲り。寶永二年八十二歳にて没せり。

著書頗る多くして大方上木せしが。我々今日に其恵みを受けて。當時得がたかりし古書をも。至る所の書肆に就きて購ふを得。難語難句をも解

するを得るは、季吟これが燭を取り、文學の暗を導きしに因るもの少なからず。中にも其有益有名なるものをあぐれば。

大和物語抄

土佐日記抄

枕草紙春曙抄

源氏物語湖月抄

百人一首拾穂抄

伊勢物語拾穂抄

萬葉集拾穂抄

八代集抄

徒然草文段抄

和漢朗詠集註

などの類。いづれも考證引例して後世を導き、懇篤到らざるなき書のみなり。子は湖春とて源氏物語悉草の作あり、孫は湖元、曾孫は春水、其次は季春、其次は季文とて、代々家學を繼ぎて幕府に仕へたり。季文幕府年中事行の作あり。

左の文は徒然草文段抄中の一段なり。古文より今文に近づき來る様を見るべし。

○

此草紙の作者兼好法師は、大織冠より十九世の後、右京大夫兼名の孫、兼顯の子、姓は卜部也、兼好も吉田の庶流にてある也。其始久我か徳大寺の諸大夫にて、官が龍口にてありければ、禁中の侍の官にて其番所清涼殿のうしとらのうしろ。御所の近邊なれば、常に玉体を拜み奉れり。又左兵衛佐に任せりとす。後宇多院の崩御なりしによりて、遁世せられにける。やさしき發心の因縁とかや、俗の時の名を即法名に用ひて兼好法師といへり。二條家の門弟にて其頃四天王といひるゝ程の歌人なれば、風雅集、新千載集、新拾遺集、新後拾遺集、新續古今集等の勅撰、歌數多く入り、其外人の口にある名歌多し。家集とて一卷あり、今世に寫しもてあそべり。彼集に修學院といふ所にこもり居たりけるよし見え、又横川にすめりとも侍り、いま吉田にも其住みたりといふ舊跡あり。其時代太平記の亂世なれ

と。ひとり燈火の下に文選文集などもあそび。老莊の道をうかひ、台家の教を學び、浮世の無常を觀じ、閑に四時の風景をあはれび、など、其一生のありさま、此草紙のおもむきに粗見えたり、或説に觀應元年四月八日に六十八歳にて失せたりといへり、未だ來歴を見ずといへども、さもこそ侍りけめ、兼好墓は双岡にあるべし、家集にならびの岡に無常所まうけて側に櫻を植ゑさせて、
契りおく花とならびの岡の邊にあはれいく世の春を過さん。と
よめり。

貝原益軒 名は篤信、通稱は久兵衛、號は益軒とも損軒とも云ふ。父は寛齋とて筑前福岡藩の醫師なるが、益軒は儒者と爲りぬ、著述百餘種に過ぐれども多くは假名の通俗文にて、婦女子に至るまで讀み易からんことを勤め、他の儒者流に習はざりしは、元祿文學の先導として、特に實

用文の先導者として讃稱すへきなり。
正徳四年八十五歳にて没す。中にも有名なる書は、

- | | | |
|------|--------|-------|
| 家道訓 | 養生訓 | 樂訓 |
| 童子訓 | 初學訓 | 大和俗訓 |
| 女大學 | 京めぐり | 大和めぐり |
| 岐蘇路記 | 筑前續風土記 | |

などあり、何れも世を利し人を益せざるはなし。
吉野のところ (大和めぐり)

凡此山は、六田の方の麓より奥の院まで百餘町の間、民家なき所、皆並木の櫻也、又左右の傍も、下の谷も、左右の陰なる所々の谷々にも、皆櫻多し、稀に杉有り、二三月の花の世界と云ひつべし、樞は谷底より多くして山にはなし、春は麓より先づ花開き初めて漸く山に咲きのぼりて、奥の院にて終る、麓の花盛過ぎて中の花盛になる、中の

花盛過ぎて上の花盛に開く。其間大やう三十日許有り。又晚櫻は麓にも所々に在りて。春の季奥の院の花盛の頃盛に開く有り。初櫻の高き所に在るも早く咲く也。凡此山の櫻は皆一重なり。八重櫻は山中及民家僧坊に一株もなし。寒風はげしき年。或は風雨久しく續けば。花の容色あし。故に年よよりて好否あり。山僧の曰此四十年以前は今よりも此山は櫻多し。今は昔より少なし。山僧又曰。凡此山の花上中下一時に不開といへども。大やう立春より六十五日に當る頃を盛の最中とす。又里人數人に問ふにも皆如此云へり。但年の寒温によりて遅速あり。是町より前の櫻多き所のさかりにあたる。吉野の町より少し前東の方に山のさし出でたる所有り。櫻の盛此あたりより左の谷の内。まへよりむかひ左より右。およそ方二十町ばかりたゞ一目に見えて。皆花の林なり。面白き事たどへていはんかたなし。雪の曙はたゞひた白にてわいだめなし。此所花の處

處にはころびたるころほひ。浮世の外の物にやどあやしまる。およそ櫻は雲すきに見ぬたるのあやなし。山の片邊又谷底にありてむかひにすき間なき所にあるを見たるがよき也。此所の花の四邊の山のかたはら谷の底にあるを。高き所よりのすみ見て。たとへば大なる盆などの内を見るやうにて侍る。かうやうのめでたき見ものは倭にはいふにおよばず。おそらくは見ぬもろこしにもあらじとぞ思ふ。其外のあだし國はさら也。子守より上の花のおそし。此山にて櫻を切る事を甚禁す。櫻木を薪にせず。故に樵夫櫻を賣らず。若し薪の内は櫻あれば。里人これを撰びすつ。是里人の偏に櫻を愛するにもあらず。藏王權現の神木にて惜しみ給ふと云ひつたへて。神の崇を畏るゝ故なり。

○

(天和俗訓)

我身の行ひの善悪は。世人のほめそしりをあながち常にして喜

び懼るべからず。たゞ道理をもて法とすべし。我行ひ道理にかなはば。世舉りて毀るとも懼るべからず。わが行ひ道理に背かば。世舉りて譽むとも喜ぶべからず。よき人に譽められおしき人に毀らるゝこそ君子とはいふべけれ。人ごとにはむる者はかへりて疑はし。多くは巧にして飾れる人なるべし。

近松門左衛門

長州の人にて毛利氏の家臣たりしが。壯年の頃家を出で肥前唐津の近松禪寺にて剃髪し。古淵と號し。遂に住侶となりて義門と改む。

後京都に上り還俗して一條家に仕へ。從六位にまで爲りたるが。又仕官の念を斷ちて井原西鶴の門に入り。戯作に従事し。遂に淨瑠璃の作者を以てあらはれたり。博識多聞。人情に通じ。慷慨を帯びたるは。其作を讀んで味ふべし。享保九年七十二歳にて大坂に没す。

臨終の時書きたる文なりとて世に傳はるもの。をこゝにあげて。洒々落たる内に社會を看破せし妙味のある處を示さん。とす。

代々甲冑の家に生まれながら武林を離れ。三槐九卿に仕へ咫尺し奉りて寸僭なく。市井に漂ひて商賈知らず。隱に似て隱にわらず。賢に似て賢ならず。物しりに似て何も知らず。世のまがひもの。唐の倭の教へある道に。技能雜藝滑稽の類まで知らぬ事なげに。口にまかせ筆にはしらせ一生を嘯りちらし。今はの際にいふべく思ふべき誠の一大事は一字半言もなき倒惑。心よ心の恥をおほひて七十餘りの光陰。思へばおぼつかなき我世へをはんぬ。もし辭世はと問ふ人あらば。

うれ辭世さるほむにさても其後に

残るさくらの花しにはは

淨瑠璃の作百餘曲に上れり中にも。

出世景清 會我五人兄弟 蟬丸

用明天皇職人鑑 會根崎心中

兼好法師物見車 國性爺合戰

會我會稽山 信州川中島合戰

など有名の作なり。彼會根崎心中の。

此世の名残夜もなごり。死に、行く身を譬ふれば。あだしが原の道の霜。一足づゝに消えて行く。夢の夢こそあはれなれ。あれがそれとか曉の。七つの鐘が六つ鳴りて。残る一つが今生の。鐘の響の聞きをさめ。寂滅爲樂とひしくなり。

の文句などに至りては。其妙いはんうたなし。儒者の徂徠さへ見て。近松が妙處此中にあり。外の是にて推しはかるべしと謂ひしとかや。

國性爺中の一章

和藤内眼をくわつと怒らし。ヤイ毛唐人。うぬらが耳のどこについ

て何と聞く。忝くもていしりう一官が女房。身が母。姫の爲めにも母同前。犬猫を飼ふ様に繩つけて通さんとは。日本人はどんな事聞いていぬ。小むつうしい。城内入らいでも大事ない。サアとざれど引き立つる母ふり放し。うれしく今ひしを忘れしか。大事を頼む身の。幾度か様々のうきめもあり。恥もあり。繩のおろか足枷手枷にかゝつても。願ひさへ叶は。瓦に金を代ゆるが如し。小國なれども日本は。男も女も義は捨てず。繩かけ給へ一官殿と。恥ぢしめられて力なく。用心の腰繩取り出だし。高手小手に縛り上げ。親子が顔を見合せて。笑顔を作る日本の。人のそだちぞけなける。錦祥女もたへかぬる。歎の色をおしつゝ。み何事も時世にて。國の掟は是非もなし。母御は。自らが預る上の氣遣なし。何事か存せねども。御願の一通り御物語承り。をつと甘輝にいひ聞あせ。何とぞ叶へ参らせん。さて此城のめぐりに。ほつたる堀の水。上は。自らがけは。殿の庭より落つる遣

水の末の黄河の川水と流れ入る水筋なり。つまの甘輝が聞き入れて。御願ひ成就せば白粉といて流すべし。川水白く流るゝのめでたきしるしと思しめし。勇んで城へ入り給へ。又御願ひ叶はずば紅をといて流すべし。川水あかく流るゝは叶はぬ左右と思召し。母ごせを受取に門外まで出で給へ。善悪二つの白妙と。から紅の川水に。心をつけて御覽せよ。さらばくくと夕月に。門の戸さつと押し開き。ともなふ母は生死の堺ぼだい門を引きかへて。是の浮世の無明門。貫の木ちやうとおろす音。錦祥女は目もくれて。弱きは唐土女の風。和藤内も一官も泣かぬが日本武士の風。追手の門の立てあけに。石火矢打ついたつたん風。一つに響く石火矢の音に聞くさへ遙かなる。夢も通はぬ唐土に。通へば通ふ親子の縁。恩愛の綱結び合ひ。結ぶあまりのしほり繩。かゝる例は異國にもまれに咲き出す雪の梅。色音はおなじ鶯の聲にぞ通事いらざりし。錦祥女は孝行ふかく。母を奥の

一間に移し。二重のしとね三重のふとん。山海の珍菓名酒を以て。重んじもてなす有様は。天上の榮花とも。又高手小手の戒めは。十悪五逆のどが人とも。見る目いふせくいたはしく。様々に宮仕へ。誠の母と痛はりし。心の内こそ殊勝なれ。

新井白石 益軒翁に繼ぎて儒者中の國文家たりしは白石なり。白石姓は源にて名は君美なれば。世に源君美と呼ぶる。父は正濟とて久留里藩中なり。幼き頃より才識にすぐれしが。長じて木下順庵の門に入り。博學強記是に及ぶものなし。元祿六年徳川家宣のまだ甲斐藩邸に在りし頃。召されて其儒官となりたるは。三十七の時なりき。此時君命に依りて藩翰譜を作る。同じき十四年の七月に稿を起して。十月に脱せしと云ふ。家宣立つて將軍と爲るに及び。幕府に召されて侍講となり。後また進んで。從五位下筑後守と爲る。享保十年六十九歳にて没す。白石決して儒臣

たるに止まりしものに非ず。經世の才溢れて幕政を補翼せし事數ふるに暇あらざるは、他の白石傳にても、徳川歴史にても讀まるゝならん。今こゝには文章家たりしを紹介するのみ。

著書は無數あるが中に有名なるをあげれば。

藩翰譜

古史通

采覽異言

西洋記聞

讀史餘論

折焚柴記

蝦夷志

南島志

西洋圖說

殊方通信錄

阿蘭陀風土記

本朝軍器考

琉球事略

東雅

などあり。

○

(讀史餘論)

廣元累世王家の臣として頼朝をたすけ、六十州をして其掌握に歸

せしめ、義時をたすけて承久の謀主たり。此人當時の望ありしかば、時政が一幡を殺せし時も、かれを假りて自らをなし、およそ義時が奸詐を恣にする。常にかれをかりて私を營みき。されば此人ひとり朝家に背きしのみにあらず。頼朝にも背きたり。其柔佞多智、是も又義時の亞なるべし。玉海に頼朝廣元に委ぬるに腹心を以てす。恐らくは獅子身中の蟲なりとのたまひし事、先見の明ありと云ふべし。

亡父の事を述ぶる章

(折焚柴記)

天性喜怒の色あらはれ見え給はず。笑ひ給ふにも聲高く笑ひせ給ひし事は、覚えすまして人を使ひ給ふにもあらくしき事のためひし事は、聞かず。物のたまふ事いかに言葉少なくて、立居輕々しからず。驚き給ひ騒ぎ給ひ事に堪へかね給ひしなど云ふ事、見し事あらず。たとへば灸治などし給ふにも、灸小しきと數すくなきとは無益の事なりと仰せられて、大きな灸を其數すくなからず

五所も七所も一時にすゑさせていたみ給ふ氣色も見え給はず。身
 靜なる時には常におはします所を淨く掃ひて壁上に古畫をかけ
 て花瓶には春秋の花を少しくさしはさみて。それに對して黙坐し
 て日を消し給ひ。又自ら繪かき給ふ事などもありき。それも色を設
 けたる事などをば好み給はず。身の病し給ふ時より外は人を召し
 て使ひ給ふと云ふ事なく。何事も手づから自らのみなし給ひたり
 き。朝夕の物をめす事も飯は二椀に過ぎず。手して椀をさゝぐるに
 その輕重によりて飯の多き少きはしるれば。其餘の物は飯の多少
 より多くも少くも食ひて。常に我腹にみつる分量を過すべか
 らず。口に叶ふ物なりとも一色をのみ多く食ひぬれば。必その爲め
 に傷らるゝ事あり。何物をも撰ばずして皆々少しづゝ食ふ時は。互
 に相制する所あるにや。食の爲めに傷らるゝ事は少しと覺ゆるな
 り。と仰せられき。よの常には此方より參らする物をめして何物を

參らせよとの給ひし事はあらず。唯四時の新味をばその出で來り
 し初に。何物も限らず參らせよと仰せられて家人と共にきこしめ
 しけり。酒はわづかも喉に下し給へば。大きに酔ひ給ひしかば。唯盃
 を把りて歡を交へ給ふのみなりき。茶をば好みてめしけり。

荻生徂徠 名は雙松字は茂卿。通稱を總右衛門と云ふ。徂徠護園共よ
 號なり。父は幕府の醫師にて方庵といへり。
 徂徠は大儒の名を得て享保十三年六十三歳にて没す。儒道の著書甚だ
 多し。左の文は隨筆より引きたり。儒者中の出色なる和文なるを見るべ
 し。

○

(南留別志)

一御とは女の稱なり。狂言に鬼のむすめを呼びておごうといふ。今
 も奥州にていふなり。

一 美しや紅にも似たり梅の花あざかほにもつけたくぞあるといふは、菅家の幼なき時よみ給ひしといふ、職人歌合あざようくたもてこよどかけりあざとは乳母の事なり。上總國一宮といふ所はあざなし御曹司の城なりといふ。千葉介が乳母にうませたる子なり。なすとはうむと云ふ事なり。

一 法勝寺の執行俊寛。吉野の執行岩菊丸あり。執行とは寺務を執り行ふ僧の妻帯にて子孫又傳へたるが。未だ童形なるもあるなるべし。

一 知をともと讀むは、新知舊知知己などの義なり。周をちかど讀むは、周親の義なり。治をはると讀むは、聖の義なり。昌をまさど讀む事は、孔安國が昌言を注して昌當也といへるより出でたり。光をみつとよむも光充也より出でたり。孝をたかど讀むも孔安國が孝經序に孝者人之高行といふより出でたり。

一 一をかすと讀むは、うたきなき心なるべし。二をつぐ、三をみつ、四をもる、五をともと讀む、伍の字と通ずる故なり。

一 罪をしぐまといふは何もの、つけたる訓ならん。

一 宅をやけといひ家をやうといふ。音訓を并べたる例もあるなり。

一 義絶といふは夫婦君臣にいふ詞なるを、父子に用ふるは大きな誤なり。

一 窃窺をにはびかど讀む事は、何に本づきたるにか。もはびかを誤れるなるべしと元喬云ひき。

一 君子をまめびと、讀めるは、伊勢物語に本づきたれば、關雎にかぎりての事なるべし。外の處には用ひがたし。

一 關々は聲の相和するなり。やはらぎなけるとは義をあやまれるなり。なきかふるなどいふべし。

室鳩巢 名は直清。字は師禮と云ふ。幕府の儒官たり。木下順庵の門に入りて十書の一は數へられし風俗なり。貞享三年加賀にて古屋を購ひ住みし時、鳩巢と號せしが、正徳年中幕府に召され駿河臺に屋敷を賜ひしより、世に駿臺先生と云ふ。享保十九年七十七歳にて没せり。

左の文の病中に記して幕府に奉りし隨筆なり。或は和、或は漢の分子を含むを見るべし。

○

(駿臺雜話)

東照宮御在世の時、御近習の若き者に、汝等身をたもつに簡要の語あり。五字にいふもあり。七字にて云ふもあり。何れを聞きたきやと仰せられしに、何れをも承り度きと申せば、五字にていはは、うへを見な。七字にていはは、身の程をしれ。汝等是を常に忘るべからずと上意ありしとなり。當世の人、大かたの目に、つけ身の程をしら

ず。それ故に自らおどろたかぶりて物事に華麗を事とする程に、家をもち崩し不義の事も出で來て、禍辱にも及ぶぞかし。むかし或諸侯の家老何がしと云ひしもの、万石以上の身にて有りしが、其國にて登城の時、わかねの木綿羽織を着けるが、路次にて雨にあうてぬれける程に、玄關の扉にかけてはしけるを、其主君折しも鷹野がへりに是を見て、わかねは日にほせば色かはる物ぞ、取り入れさせよと云はれけるぞ。又同じ頃親藩の家にて物頭たりし者、黄金十兩にて着かへの鎧を威せしが、今當家中に是程の金出して鎧威す人は有難かるべし。武具は格別の物なれば、かくは結構にえつるなり。子孫わが此意をよく知りて忘るべからずと、一筆書きて今の鎧に添へて家に残しけるぞ。又同じ頃諸侯の中に世に賢君と稱するありしに、其家老の子弟年若なるを、蒔繪の印籠に大きな珊瑚樹を緒じめにして腰にさげたるを、其主君見どがめられ。他日に其人

を前へ呼びて。汝は印籠を好むと見えたり。此印籠は藥をよくもつなり。是をさげよとて黒ぬりの印籠にもくれんじを緒じめにして賜はりけり。それより國の貴族皆恐れて華麗を禁せしとなり。是等は皆六七十年以前の事ぞかし。いつの程に風俗かく驕奢にはなりぬるや。馬具武具は軍裝にかゝる物なればいかゞはせん。それも華麗を專にし物ずきを事とするは。何の用をなす事にやあらん。ほめられぬ事なり。

實録物 質樸簡略の文にて著明なる出來事を記したる文あり。世に是を實録もの敵討ものなど稱へて。尤も當時俗間に行はれしものなり。其一二をわけて元祿文學の遺物を示さんどす。慶安太平記は由井正雪事件の始末を記し。赤穂精義内侍所は淺野内匠頭事件の始末を記したるものなり。

正雪再び道灌山へ浪人を集むる事 (慶安太平記)

時に慶安四年七月十八日の夜。正雪が下知によつて上野九つの鐘を相圖に馳せ集まるは。當時江戸在府の者ども二千二百人。道灌山に充満せり。正雪柴田丸橋を始め。其外頭分の輩思ひくゝに裝束美しく立ち出で。正雪麗を取つて床机にかゝり。白地に菊水の旗を持たせたり。忠彌は左の方に同じく床机にかゝり。軍配團扇を持ち。是も旗一流中に摩利支天尊と大文字に書きたるを夜嵐に吹きなびかせ。大將正雪黒白の二疋の牛を切つて天地を祭る。副將軍忠彌松の枝を切つて下知しけるは。天の時既に至つて多年の大望成就せん事定めて日取は廿六日に極まつたり。されば面々の妻子どもは越が谷精壁へひきとるべしといふ。時よ正雪云ひけるは。我は二千八百人の内千人を引卒して廿一日より駿河へ趣き。残る兵は丸橋柴田の兩將に隨つて働くべし。人間一生わづか五十年なり。名は

末代にどゞまれば名こそ惜しけれ。面々の忠勤に依つて對の二本道具金紋の狭箱を持たせん事近きにありと。諸人をはげまし。扱また駿河の足洗村半左衛門方へ飛脚を立て。兵糧の事當月廿四日より小船を以て駿府まで廻し候へど催促し。夜明も程あるまじとて。御城の方へ向つて二矢放し。千秋樂を祝しておのゝ宿所へ引きとりける。

義士の面々城中にて血判の事 (赤穂精義内侍所)

さるほどに四月十一日の大寄合。是まで以上十一度目なり。諸士三百餘人を城に集め。大石内藏介廣間に出で、申しけるは、是まで會合する事都合十一度に及び候ふといへども。未だおのゝ一決せざるなり。此上百度千萬度思慮を廻らすとも。どかくに死をきはめ而して後に事をはゐるより外なし。もし是をきはめぬ内官使到來ありて。武將斧鉞をとり武器をかざり城面に屯をなさば。俄にと

り亂して必敗亡に及び。君の汚名の上の恥辱を重ね候ふべし。依つて今殉死一統に極めたり。其上にてもし多川月岡が歸り離散せぬやうの吉左右を告げ來らば。皆一同蘇生して君に仕ゆる。又相同之。忠臣義士の道は死を以てよしとするなり。又大學殿の出世をばまつて君家を立てんとするは。遠くして難し。かつ君恩を忘れなば。武名を汚す。然れば某に於ては。上使を待ちうけ。所詮腹切つて死せんより他事なし。もはや外に論議あるとも聞くべからず。我に與する輩は。一々姓名を記して血判いたさるべしと。兼て用意したる盟書を出だし押し開き。我名を記して小指をつき血判すれば。武士の面仰せよや及ぶべき。恩を泰山の安きに得て。命をしみ候は。武士道立たずと。われもくと姓名を記して血判せり。

作者作例 其二(和歌俳諧)

鳥丸光廣 當期公卿中の歌人なるべし。父は光宣と云ふ。從一位准大臣たり。光廣權大納言と爲り。正二位に進み。寛永十五年六十歳よて薨す。風流磊落なる人にて。常に十疊ばかりの居間にうき物を一杯ひろげおき。机一脚硯石一つ。三本入の扇子箱に筆を入れたるが。室内に他人を入れざれば物はすべて塵まみれなり。参内の時も會に臨む時も此扇箱を車に入れて持ちあるけり。或時關東へ下り留守なりし間に。彼書齋の前なる土藏を雜掌ども邪間なりとて取りこぼちしが。歸京の後何どの一言もなかりければ。雜掌すゝみてお庭の趣うはりは仕らずやと問ひしよ。如何様ひろくなりたるやうなるが。藏はいかゞせしと言はれしとぞ。その物に拘はらざりし事大かた此類なり。

歸 鴈

越路には歸るをくるといひなして

待つらん春に初かりの聲

歳 暮

なす事もあらじ今はのよはひにも

をしみなれたる年の暮かな

冬の初め攝津國鶴殿といふ所にしるよしゝて。澤庵和尚をいざなひまかりて。芦ふけるこやにまうけなせしけるに。禪師おそく來りけるを待ちわびて尋ねまかりければ。あたり近き阿彌陀淵といふ所の紅葉の陰に眺望して有りけるを見て。とりあへず。

もみぢ葉もにし吹く風のさそふなり

心なとめそなむあみだ淵

富 士

立ちまがふ霞も山のなかばまで

ふじこそ春のたかねなりけれ

下河邊長流 大和の人なるが。中年より攝津に住み、讀書を愛して閑
 日月を送れり。大坂の富人とも其學識を傳へ聞きて門人と爲るも多け
 れど、氣に向かぬ時は富家の招きにも應せず。來客にも物を言はざりき。
 水戸の光國卿其才を慕ひて召したれど、遂に行かず。さらば萬葉の註を
 と依囑ありたるに、是又怠りがちにて成らざりき。貞享三年六十三歳に
 て没す。

著述 續歌林良材、枕詞燭明抄などあり。歌集を晩花集と云ふ。

若菜

けさ消ぬし垣根の雪のたまり水

野澤に似たるわりなをすつむ

夏の歌

谷の戸をあけて水鶏は音せぬを

なほ岩たゝく山のしたみづ

しばしとて笠やどりする陰もなし

夕立さわぐるなのさゝはら

紅葉

萩が花野べのさかりはとく過ぎて

山のにしきにうつる秋かな

芭蕉 姓は松尾、號は桃青と云ふ。伊賀の士なりしが、故あり故郷を去

りて京都に遊學し。寛文の末江戸に來り、小石川の水道工事の人夫に雇
 はれしが、其後剃髮して風羅坊と號し。深川に庵を結ぶに及びて芭蕉庵
 と號す。博學多識にして佛に通じ、畫をも能くす。貞享四年常陸の鹿島に
 遊び、同じき五年に大和めぐりし。元祿二年は陸奥に旅し、同じき七年
 の秋大坂にて没す。年五十一なり。

門人に其角嵐雪去來などの名人あり。今こゝに併せしるさんどす。
 其角姓は板本。江戸の人にて。儒を學び醫を學び詩を學び書畫を學びて
 多能なり。後芭蕉の門に入りて。晋其角また寶晉齋と號す。或時一卷の点
 取を遣はしたる人ありしに。開き見て此卷あまり又初心なり。我附墨を
 勞するに及ばずとて返却せり。さらば点料をも返し給へと使の者曰へ
 ば。いや是は見料にどめなくすと曰ひたる話あり。洒落思ふべし。寶永四
 年没す。

嵐雪姓は服部。淡路の人なり。江戸より出で、武家奉公をせしが。後身を風
 雲に任せて家を漂出し。芭蕉の門に遊びて俳句を樂しみたり。寶永四年
 五十四歳にて没す。
 去來姓は向井。肥前の人なるが。京都に住みて芭蕉の門に遊ぶ。其住家を
 落柿と名づけ。自ら壁書して曰く。

一我家の俳諧に遊ぶべし。世の理屈をいふべからず。

一朝夕かたく精進を思ふべし。魚鳥を思むには非ず。

一速に灰吹をすつべし。煙草を嫌ふには非ず。

一隣の居膳を待つべし。火の用心には非ず。

と風流また此中にあるべし。隣の居膳とは屋敷守の與平といふもの。朝
 夕の食事を送りし故なりと云ふ。寶永元年没す。

六月や峰よ雲おく嵐山

芭蕉

山路來て何やらゆかし萱草

益すぎて宵暗くらし虫の聲

今宵たれ吉野の月も十三里

名月や池をめぐりて夜もすがら

秋の空尾上の杉をはなれたり

其角

文のあとに櫻さし出す袂かな

うら枯や馬も餅くふ宇津の山

蒲團着て寐たる姿や東山

嵐雪

梅一輪々々ほどのあたゝかさ

花に風かろく来て吹け酒の泡

岩ばなやこゝにも獨り月の影

去來

木がらしの地にも落さぬ時雨かな

荷田春滿　また東磨ども書す。本姓は羽倉よて通稱を齋宮と云ふ。伏見稻荷の詞官にて父は信詮と云へり。家をば弟に繼がせて自身は國學の復古を以て任とす。蹈みわけよ倭にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ書の道かはの歌は世の誦するところ。此一首にても漢學排擊國學擴張の精神の充満せしを知るべし。また中古以來歌道の淫靡惰弱に流れしを

憤りて自身は誓つて戀歌をよまざりしと云ふ。又以て其皇道振興の點よ慷慨を注ぎしを見るべし。

契沖春滿の二學者京坂に並び出で、彼は語學を主とし此は國學を主とし。以て我國復古の學問を起したり。春滿かねて國學校を創設せんとて既に官許を得。東山に地所まで定まりしに、事成らずして没せり。時に元文元年六十八歳の時なり。

著書の草稿は多かりしに、終に臨みて皆其説の未熟なるを耻ぢ燒き捨てしめしとぞ。世に傳はるものは。

萬葉集童蒙抄

伊勢物語童子問

など數部のみ。家集を春葉集といふ。

歸雁

天つ雁こゑゆく山のそなたには

霞まぬつらを今や見送る



螢

暮るゝより人は音せぬ道のべを

よるゆくものは螢なりけり

尾花

秋風の松をしらぶる度ごとに

岡べの尾花袖かへすなり

待春

立ちかへる春をひとへに松浦がた

ひれふるとても年はとまらじ

有賀長伯

京都の人にて家號を以敬齋と云ふ。和歌の一家を成し、彼

古學派の歌風とは反對の地位に立ちて。謂はゆる元祿風体とも謂ひつべき歌よみなり。

元文二年七十七歳にて没す。著書は後學歌人を導くもの多く。

歌枕秋寢覺

初學和歌式

和歌八重垣

濱の眞砂

麓の塵

源氏掌故

など世に珍重がらる。家集は長伯集として二卷あり。

遊難波の内に

きのふまで紅葉みだれしなごりをや

朝日に残す冬のかはみづ

都にはこゝろいそげど川舟の

さすが難波もあどに戀しき

僧契冲

古言を探り古意を尋ねつゝ學問を萬葉の高きに復したる

は、實に此法師に起れり。父は尼崎の藩士にて下川善兵衛元全と云ふ。契

冲十三歳の時僧と爲りて所々に住みたるが老年の後は大坂の高津邊に小庵を結び圓珠庵と號したり。水戸光國卿は之を聘せんとて使を賜ひしかども世捨人の身なりと辭して遂に參らず。依つて家臣安藤爲章を遣はして其説を學ばせられしに萬葉代匠記同總釋または古今餘材抄厚顔抄などの書を著はして奉りぬ其恩賞は白金千兩絹三十疋下されしと云ふ。寺の修繕貧人施行等の事に用ひて自身は一錢も蓄へざりしと云ふ。元祿十四年六十二歳にて没す。右著書の外に。

百人一首改觀抄

勢語臆斷

源注拾遺

河社

和字正鑑抄

雜記

などあり家集を漫吟集と云ふ。

餘寒

水さむみわらふ若菜の雫だに

かたみにたまる朝氷かな

海邊霞

もしはやく難波の浦の八重がすみ

一重は海人のしわざなりけり

鹿

秋ふりみ山田のかけひ水たえて

かよひかはるはさを鹿の聲

雁

霜がれの伊勢の濱荻かれはて、

くまなき月に雁がなくなる

第二期

總論

元祿文學は既往と爲れり。望みを屬せし通俗文章は壓倒せられたり。今や彼契冲春滿に起りたる復古の國學は草木の春に遇ひしが如く。いよいよ開けて加茂眞淵本居宣長平田篤胤等の數大家を出だし。文を祝詞宣命の古体にし。歌を萬葉古事記の古風にするも難からざる有様に至りしかば。世の此學を志すもの學んで古に似ざらん事を恐るゝ餘りに。文學と世間との關係をも忘れたるが如くなりき。甚しきに至りては日用書簡の文言をさへ。説明註釋の文句をさへ古文に綴らんとする傾ありを見る。天地すでに延喜天曆に非ず。人情を代表する文章獨り延喜天曆たるべき理あらんや。況んや奈良以前に遡るをや。然れども當時の學者舉りて此傾を爲したるものは。抑も原因なきに非

ず。彼謂はゆる闇黒時代後の文學界は。自然の發達中より自由の光を生じたる事こそあれ。學問上よりいへば。文法亂れ語格くづれて一は歸する道なく。古事記萬葉は誤訓の上に誤訓を傳へて古訓の正しきを得るに由なく。一步を過たば再び挽回すべからざる物と爲らんも知るべからねば。學者は全体の精力を此に注ぎ。先づ此亂雜なるものを矯正するに。上古の純正なる時代にためかへして。其大本を立てざるべからずとの方針に。輿論は一決せり。是れ其萬葉の註釋一時に並び起り古事記祝詞宣命の註釋尋いで出でたる所以なり。古文を解くには古意に通せざるべからず。古意に通ずるには萬葉に熟せざるべからず。萬葉に熟するには自ら先づ古風の歌をよみ習ひて其妙味を知らざるべからず。とは眞淵宣長兩氏の常に説くところなり。此に於て古風の歌起り古言の文章も行はれたり。一たび上古文章の註釋出づるや。土佐竹取伊勢源氏と引きつゞき其註

釋書世にあらはれて、國學と云へば註釋を以て專業とするもの、如き奇觀を現し來れり。是又止むを得ざる順序のみ、當時の註釋家は或は我説を述べん爲めに殊更に古文を借り、我風体を言はん爲めにわざ／＼古歌を擧げて註釋評論せしもありたれば、猶活物なりしに、後世の無主義無見識にて、ちうさく作るのみを學者の本分と心得るこそいふかしかれ、而して其起原のこゝにあるなり。

國學者は學問を高尙よし奈良時代に遡ることいよ／＼深きと共に、世俗と離るゝことはますます／＼遠くなりぬ。此も於て漢學者の人倫經濟を説いて世俗と交を親しうし、俗文學者は分りよき文章を以て之を勸戒悲喜せしめつゝ、再びこゝよ首をあげたり。漢學者流の一變して俗文も近づきたるは、此時よやあらん。

俗文學者の戯作者と爲り、隨筆家と爲り、記行作者となり、實録作者と爲りつゝ、和漢文体もどより之を用ひて裝飾とし、通俗を以て其目的とせ

しかば、事實或は野卑に傾くもの多きよもせよ、言葉富み思想自在よてますます／＼世俗文學代表の機會を近づけ出ださんと待つゝ似たり。

國學者もいつまでかくてあるべきならぬば、遂には彼俗文体の有益なるを知り、漢學者流の國字解と云ふものあるに習ひて、歌文の註釋講筵の筆記等に平語俗語を用ふる事、古今集遠鏡、平田の講釋本の如きに至りしかば、一方には古雅古癖の死文章家たれども、一方には多少の活路を開きたり。其雅俗と謂ひ古今と謂ひ、雨霞雪や氷と暫しは隔つる如くなれども、解くれば同じ一河の流に歸し去るべきは自然の道なり。而して其速力いまだ増さる内に、方針を他に轉じ去られしを如何にせん、何物か之を轉じ去らしめたる。曰く頼襄の日本外史のみ。

頼襄と文政天保の頃に出で、漢學者流中一機軸を出だし、我國將門の興亡記を著はして日本外史といふ。其文は史記より來りて讀むに快く、以て儒夫をも起たしむべく、其事は保元平治以下の軍記雜史より出で

て見るに面白く、以て兒童をも感せしむべし。世人既も腐儒者流の羈絆を脱して我國史の學ぶべきを知れども、彼軍記雜史文体の今に遠くして小説に近きを嫌ひ、國學者は唯古書の註釋にのみ耽りて未だ通俗歴史を作らんとさへせず。漢學者は殆んど普通教育の地を占めて、國文は迂なり俗なりと誤解せらるゝ世の中なりしかば、此外史の出づる。大旱の雲霓飢者の粥汁も管ならず、忽ち六十餘州の文學界を風靡して、學校あれば必ず外史の課を置き、歴史文体と云へば十の八九は外史体を用ひて、出處を之に取り、又軍記雜史の本書あるを知らざるに至りしは、外史文体の時勢に應じたるといふ云へど、抑も國學者流の自ら歴史家たるべき大權を捨て、彼に與へざるものと謂はざるべからず。國文決して迂なるものに非ざれども、國學者隨分迂なりしものなり。國文の俗なる固より嫌ふべきものゝ非ざれども、漢學者流の眼より嫌はれしなり。然れども學派四分五裂の勢を爲したる徳川の末期に此流行を見る。何ぞ

怪しむは足らんや、獨り怪しむ國民教育既に其方針を一にすべき明治今日の社會にして、かの外史体歴史が教育界を圍む事を試に見よ。

二騎あり馬に鞭うち流を亂して進む、先なる者は景季後なる者は高綱、高綱後より景季を給いて曰く、子の馬條慢しと、景季馬を駐め條を約す、高綱すなはち超乘して過ぐ。

などの文体比々皆是なるに非ずや、中古の兵制を論ずる毎に。

殷富の百姓才弓馬に堪へたるものは専ら武藝を習ひ、以て徵發に應じ、其羸弱なるものは皆農業に就かしむ、而して兵農全く分る、などの語氣常々然らざるはなし。近世文學史を讀むもの此に注意せざるべけんや。

右は教育上の流行文体のみ、眼を轉じて彼國學社會を見れば、神道國史を主とするあり、歌物語を主とするあり、古實律令を主とし、考證註釋を主とするありて、學問ますます精密にわたり、従つて各専門を異にし、文

政天保に至りては著述の夥しき事古今無類の盛代に達したるを見る。また彼戲作社會を見れば馬琴的の讀本を主とするあり。春水の人情本を主とするあり。種彦的の草雙紙を主とするあり。或は蜀山人的の狂歌狂文を主とし。或は一九的の滑稽諧謔を主とするありて。其種類數へもされぬほどなりき。

今や歐米學術もやうく入らんとして。明和安永の比より和蘭書の翻譯其緒を開き。杉田玄伯の解体新書。桂川甫周の魯西亞志。北棧開略。萬國圖說。前野良澤の和蘭文略。蘭譯筌助。助語参考。大槻玄澤の蘭學階梯など引き續き世に出でたり。是又徳川文學の富を助くる材料と爲りて。明治文學の新天地を預言せしものゝ非ずや。

實に徳川文學は文体に富み。學派に富み。此四分五裂中に自主自由の空氣を含みつゝ。王政維新の新天地を待つて一致を謀らんとせるが如し。

和文体

眞淵宣長の學派は古事記萬葉を祖述して古文体を作り。

八百萬御代はわれど眞盛みさかきにおし足らひたるまも多まならず。千萬書ちやうせんかはあれど眞心にうるはしびたるなも稀まらなりける。かけまくもかしこき神かみるぎの大御繼を言舉げまして。大倭は初國知らしゝより。こなた大御繼々神ながら神の道みちましつゝ。いや興しに事興し給ひ。まし榮さかぬに國榮えおはしましよけり。(眞淵)

荒木田の久老神主は世の人の五十槻の君と聞ゆなるは。其家ぬちに物學ものまなびせす所をし五十槻園といへばなりと。風のどの遠とほとに聞きて思へらくは。中略ちゆうりやく己れはた此あるとど。同じ心に縣居の大人の教を受けて。學まなびの道にははらかなす故よしゝ。あれば。是も又おやじ心にうれしみなも。(宣長)

の極端に至るもあり。又其中に伊勢源氏枕草紙などを祖述しつゝ。

縣居の翁の筆の跡に大凡三つの姿なんありける。其初めのほごなるはまめにうるはしき筋をむねと立て、かりそめにも乱れたる處なし。其なからのほごなるは世にかゝはらぬ高き心ばへありて、やゝうるはしきにはひ失せて、おのづからに強き勢あり。其末のほごなるは物を物にもあらず思ひけちて、筆のまよゝつくるひたるふしなく、唯心やりのすさみなん多かりける。(春海)

梅はよろづ花のまだしきはごに先づ咲き出でたるがめづらしきに、木のもと遠くにはひくる風のたよりもなつかしう心ごきめさせられ、遠山里の霞がくれよ紅ふかく咲きわたれる桃園はた、椿山梨なごのつらにおりしう。さて、藤山吹なごどりくにおかしう覺ゆべかめれど、此何がし(櫻の事)の際はなれめでたきには、猶くらべがたかるべし。(太平)

のや、平易なるものもあり、此平易流暢なる中古体のもの、遂に和文体

の標準と爲りて、雅文雅言と呼ばれ、彼上古体は祭文碑文の如き神聖の場合にのみ用ひられて、古文古言と稱せらるゝに至れり。而して戯作者狂文家までも殊更之を摸擬して、品格を装ふに至りしは、

こなたになみゐて夕飯ゆふけくふ人は信濃國の人とか、大きな椀わんに飯たかう盛りたる。さながら越の白山を折敷せつきの上に移し、すゑたるやうなり、あつもの汁一口にすゝりて、あいせの魚かしらも骨ものこりなく、食ひつくしつ。さていへらく腹をそこなひて、日おろになり侍り、こゝちあしければ、じねんに飯はむももうまくも非ず。今宵たゞまりにいつゝばかりをたうべぬ。かばかりあては心ぼそしやとて、ふしめになりていふ(石川雅望)

などの文を見ても知るべし。

漢文体と訓点

前期の漢文体はやゝ和文体を容るゝ如くなりしよ、やうく其親密を失ひ。我文法語勢にも依らずひたすら漢文の直譯体を現出せしは訓法點譜の沿革あづかつてこゝに至らしめたるものあるなり。

遡りて考ふれば、中古の漢文を學びしもの先づ點譜といふものを作り。例へば人の字の右肩に點を置きたるは人ヲと讀む印し。其下の右角にある人の印し。左肩なるは人ニ中央なるは人ノの印しに用ひ。又動詞ならば知の字の中央の上なる點が知ラン。右の傍が知ルナリ。下の右が知ルナリ。中が知リケリ。左が知リタリとやうに定めて。一語一音も誤なからん事を要し。之を乎古止點と名づけて。學者の家々に傳へたるものなりき。然るに近古の闇黒時代を経て此事つひにすたり。我儘勝手の訓法になりぬたるが。林道春出で、徳川文學を起したると同時に。先づ四書の訓讀法を定め。片假名もて文字の右脚に送假名を附け。數字等の印しを左脚に附けて彼乎古止點を一變せり。之を世に道春點と云ふ。點と

は乎古止點より出でたる詞なり。次に闇齋點出で、道春點と共に行はれたれど。其間に大同小異あるのみにて前期を終りたり。當期に至りては後藤點出で、次第に改良を加へ。漢文を讀み漢文を作らんとす。一定の讀法確立して大いに進歩せし如くなれども。今其特點に就きて詳かに之を見れば。道春點の出來得るだけ國語に反せざるやう。國語を崩さぬやうにとつとめたるに。闇齋點はやゝ之を破らんと欲するが如く。後藤點は一步を進めて音讀を多く用ひ。寧ろ國語を破るとも漢文の都合よくせん事に盡力せしが如く。一齋點に至りては全く漢文の奴隸と爲りて國語の爲めをば少しも思はざるが如し。之を要するにいよく出で、いよく悪しくなり。雅言にもあらず俗言にもあらず一種の譯讀法と爲りて毒を國文の上に流し來らんとす。今その著るしき相違を三氏の訓點に附きて示さん。

一 邦道有ルトキハ廢セズ邦道無キトキハ刑戮ニ

邦有道不廢邦無道免於刑戮

免カレシ。道春

邦道有レバ。廢セズ邦道無ケレバ。刑戮ニ免カレシ。後藤

邦道有ル。廢セズ邦道無キ。刑戮ニ免カル。一齋

君ニ事フルニ。禮ヲ盡シヌレバ。人以テ諂ヘリト

事君盡禮人以爲

爲ス。道春

諂也

君ニ事フルニ。禮ヲ盡セバ。人以テ諂フト。爲スナリ。後藤

君ニ事フル禮ヲ盡ス。人以テ諂フト。爲スナリ。一齋

視之而不見聽之

之ヲ視レドモ見エズ。之ヲ聽ケドモ聞コエズ。道春

而不聞

之ヲ視テ見ズ。之ヲ聽イテ聞カズ。後藤一齋

これにて一歩々々と國語に遠ざかり來りて一齋點の出でたる天保嘉

永の頃は國文混亂の前兆を現はしたるを見る。是れ彼外史文体の行はるゝと同時に、惡漢文体を後世に傳へて一種の惡文法を初めたるものと謂ふべし。外史の事は既に論じ盡せり。今また言はず。

俗文体

和漢學者は之を解釋の文に用ひて初學を導かんとし。小説家は之を卑近滑稽の事に用ひて下流を笑はせんとし。以て彼高尚迂遠の文と遙に聲援しつゝ、遂に雅俗席を同じうする時節を待つに似たり。式亭三馬が

國學大人示していへらく、かみいせんとは髮結殿の訛れるにて、これをしもひつじと呼べるは、羊のかみをすくといふより稱へ來るとおぼゑたるは、例の漢籍又泥める説歟。今按するも、ひは日なり日髮又結ふに據る物ぞ。つは月の下畧。是は月ぎめに留め置く故なり。さて又じとは如何。其時先生些も騒がず。チト假字と違へども、日

髪月ぎめの客多くて朝から晩まで立續けよ結うて居る故。痔の無い者も痔者になる。これに仍てひつちなるべし。又一説にしごの玄の字といへり。油めらけになるを想へば、穢れるは是濁る也。其濁りをビヨイと打つて、じの字なんぞいそでごんすと。意味深長なるお考へ。(浮世床)

通俗体と小説

和漢文体は高きに僻し。俗文体は低きに僻す。其間に行はれたるは通俗体なり。通俗とは意を俗よし文を平易にして。兩端も傾かず讀みよく分

りよきを主とするを謂ふ。其著るしくあらはれて流行を作り。流行を代表するものは小説なるべし。

小説は中古の物語に起原し。近古の軍記草紙を経て前期に至り。大成の運に達したりしが。文化文政の頃よりますます其歩を進めて弘化嘉永に至り。讀本体を主として勸懲を表はす京傳馬琴あれば。草雙紙を専として婦女子向なる種彦柳亭應賀(萬亭)あり。人情本を主として下流を喜ばす春水(爲永)曲山人(娘節)用作者(若)あれば。滑稽を主として下流を笑はす三馬(式亭)一九(十返舎)あり。各その技を戦はし腕を振ひて徳川文學の成功を促すが如し。今試みに。

わはれや悉達太子は御名を罹曇沙彌とあらため。師の命うけて畏まり。桶と籠とを携へ出で。なれもならばぬ御修行に。いつまでこゝに墨衣。谷間々々を見わたせば。北に聳えし雪山の峰より吹き來る雪おろし。鷲の御山は峨々として。まのあたりにそびえたり。應賀作

大和文庫

折しも高師直郎の塀を乗り越え。邸より逃げ出でんとする武士あり。雪の明りに甚三郎は早くもそれと見出だして。腹の内に思ふやう。こやつ必ず高の家來。臆病未練の心より逃れ去らんとするならん。彼も敵の片割なるを見すく。それと知りながら。逃がさんは殘念なり。要こそあれどうなづきつゝ。有り合ふ雪を引摺み。礫の如く握り堅めて。窺ひよりつゝ。打ち付くる。春水作いろは文庫の文を讀まば。其時好の如何なりしかを知るに足らん。

〇和歌

國學の復古と共に和歌の風体も萬葉の昔に復れり。之を古風と謂ふ。次に三代集の正しきを學び。新古今の花やかなるを習ひて。闇黒時代の亂調を一洗するを得たり。此体を近調と謂ふ。或は甲を主とし。或は乙を得

意とするもあれど。國學者流には並び行はれたり。古風の例は。

とりよろふ天のかぐ山よろづよに

見ともわかめや天のかぐ山(宣長)

以て見るべし。近調の例は。

吹くもうし吹かねば花の霞む夜を

思ひわづらふ花の春風(同上)

以て見るべし。前には類題草野集あり。後には類題鮫玉集ありて。當期の歌人作例を網羅し。徳川文學の隆盛を讃稱するに似たり。要するに其風潮の向ふところ。宣長以來の近調を主とするもの十の八九に居て。又闇黒時代の痕跡を留めざりき。實に盛なりと謂ふべし。此に於て西京には景樹出で。江戸には歌城(小林文雄井上)出で。其古体に泥む弊風を一洗し。再び歌道の新天地を開かんとす。徳川文學の末期豈不満足なりとせんや。

(長歌)

長歌は中古以來の衰微また振はずして當期に至れり。當期の復古は之をも誘ひ起したりといへども、眞淵宣長の數大家を除く外は、唯模擬無氣力の言葉を連ねたるまでにて、誦するにも足らざるものゝみ。今其一二例をあぐれば、

わらたまの年の春秋。八千草に。花はさけども。くれなるの。花はわれども。夏の池に。みつ葉おひつゝ。紫に。にはへる花の。かきつばた。さきのさかりを。若草の。妹が衣に。いろふかく。摺りて。ばよけん。うつして。ばよけん。(經邦)

日ぐらしの。鳴くなるなべに。かぎろひの。夕さり來れば。玉簾のをす。卷きかゝげ。はしるして。風まちをれば。すゝしけく。風も吹き來て。くるしけき。こどもわすらへ。手にもたる。扇も置きつ。秋ちかみかも。(政)

詔

これにて他は推すべし。然れども人々短歌のみ甘んぜずして此長歌を希望する心は、ますます熱を増し來りて、改良の運におはん事を待つが如し。此に於て末期に遊翁(海野)出で、古言に泥む弊風を一洗し、やゝ長歌を優美自由なる針路に向けんとす。すなはち、

蓬生は。いつとわかぬ。秋のくる。けふの夕べよ。なぞてかく。さびし。かるらん。穂にいでぬ。籬の薄。つゆおかぬ。苔の通路。みるごとに。あはれぞまさる。秋の來るより。

その一例なり。然れども猶弱きに失し平凡に流るゝ弊なきも非ず。同時に守部(橋)出で、長歌撰格を著はし。長歌の法則を定め語法句法を示し。之が改良を期せんとせり。然れども又再び窮屈不自由のものゝ爲りて。未だ其法則の實益を見出だす能はざりき。明治の今日に抑も如何なる結果を生せしや。

(文法)

復古の國學と共に語格假名遣の文法も中古の亂れざりし昔にかへれり。假名遣は前期の末に出でたる契沖の和字正濫抄に起原しては語格の書は富士谷成章のかざし抄、あゆひ抄、本居宣長の詞の玉緒、其子春庭の詞の八衢、詞の通路等に基礎を定めて、以て世の和歌和文に従事するものをして、國語に文法のある事を知らしめしは、復古國學の一大功德なりけり。此以前には、

ぞるこそれ思ひきやとはさりやらん、

是ぞ五つのとまりなりける

(ぞと係ればると結びこそと係ればれと結び思ひきやはと
はの受詞ありはと云へばりの結わりやはらんの結あるを
教へたる歌なり)

などの簡單なる法あるのみにて、精密よ之を教へたるもの決してあらざりき。無きこそ道理よ、闇黒時代以前又は言文互に近くして用ひ誤る恐少なかりしが爲めのみ、今や然らず。文体の四分五裂と共に學派の四分五裂と共に、不規則甚しき文學の其間に行はるゝあれば、此に於て之を制御し、其一定不易の法則を古文に證して立てざる可からざる場合となりたればなり。然れども先づ近きよりして遠きに及ぼすは順序の得たるものなれば、僅かに和歌和文の上のみ行はれて當期を終れり。而して之を國文の法則とし、萬國文法中の一大地位に立たしむべき明治文學の基礎をば、こゝに定めたるなり。

○俳諧狂歌

和漢文体の上流よ行はるゝあれば、俗文体通俗文体の下流よ行はるゝあり、歌また然らざるを得ず。此に於て俳諧狂歌の此間に勢焰を逞うす

るあるを見る。
俳諧は前期に之を語りますく行はれて田夫野人も之を弄ぶに至りぬ。狂歌の俗語交りよ滑稽を主とせし歌なり。當期に至り蜀山人出でて其風調大いよ進みたり。其頃同時に唐衣橘洲。大根太木。智惠内子。平秩東作。濱邊黒人。朱樂漢江。本木綱。四方歌垣。後よ眞顔などの人々起りて。是までは歌人文人の興に乗じてよむ事なりしが。今は専門の業となりて狂歌師と稱ふるに至れり。是また徳川文學隆盛の餘興として。此愛敬文學よ及ぶ又満足なきなり。

作者作例 其一(文)

賀茂眞淵 契冲春滿に繼ぎて古學の道統に燈を取りたるは眞淵なり。初めて萬葉の風を摸し古文古言を擬し得たるは眞淵なり。眞淵之遠江の國の神官定信の二男よて姓を岡部通稱を參四。また衛士と云ふ。享

保十八年京都よ上りて春滿の門よ入り。遂よ學成つて名を天下に顯はせり。

寛保三年江戸に出で、明和元年より濱町に住めり。此時庭を田舎の樣よ作りなしたるによりて。縣居と名づけ家號とす。

延享三年田安殿に召されて國學の師と爲る。此よ至りて國學の隆盛やうく大名方の上よ及ばんとする勢あるを見るべし。

明和六年七十三歳にて没す。著述は。

萬葉考 冠辭考 語意考

祝詞考 神樂歌考 催馬樂考

伊勢物語古意 百人一首初學

源氏物語新釋 歌意考

文意考 萬葉新採百首解

古今集打聞

などありて、畢生の力を古文の註解に費やしたり、遺稿を賀茂翁家集と謂ふ。

實朝卿家集序の内

或人此大まうち君の歌は定家のまうち君に習ひ給へりと云へど、そは難波津を手習ふほどの事にして云ふにもたらず、後に心を得給ひつるに至りては、今の都と下れる姿ならねば、彼躬恒貫之といふも師にたちあへんかは、古き詞を用ひられたるさま、古今集の中にもよみ人知らぬ古き歌なるにつけるもいさゝけはあり、寛平延喜の頃の詞をたまくとられたるは、ふさはしからぬ多き。しかれば藤原奈良の宮のはじめつかたにこそ師と云ふべき人はあらめ、さて定家の卿のしるしたまへるものに、鎌倉の右府はたけたる歌よみと不覺ゆる。此歌を見る時は歌のものうくなりぬと不あなるは、さすがに此卿ころの給ひたれしからは、是に起き給ひな

んをいど老いたまひて日なきなるべし、さて新勅撰にあまた入れられたる其歌の高きしらべ雄々しき心を、後の人はいかで思ひざりけん、せばき箱の内に在りてしかも、後の世のをみなめく歌をいひならへる人、天地の大がたみの申なるますら歌を見ては、とみに心のかぬにやあらん。

湯淺常山 名は元禎、通稱は新兵衛、備前岡山の藩士にて、子傑の子なり。儒學を服部南郭に受く、常に武道を好みて、老年の後までも日に一度刀槍を使はぬ事は無かりしと云ふ。

天明元年七十四歳にて没す。著書中にて常山紀談も、つとも世に知らる、其凡例第一に曰く「凡此書天文永祿の比より泰平又及ぶまでの事實を集めしるせり、戦國の時勢國初の風俗武人の言行是皆世をみる人の尤も知るべき所にして、是れ輯録の本意なり。明君賢佐亂臣奸賊の勸懲に

具ふべき自ら其中に見ゆれば、必しも評論をしるさず。と此書精神のあるところを知るべし。

本多三彌木下肥後守義經辨慶を批評せられし事

本多佐渡守の弟に三彌と申し、は、以の外に直言をいひ出す人なり。台徳院様に御奉公申上けるに、或時權現様。三彌は能くすねる者なりと上意なり。其後一萬石拜領なり。權現様。三彌を召し。料簡を改め人柄を嗜む故ならんと上意有ければ、三彌承り。將軍様は殊の外御奉公申上能御座候。あの如くなる主君にすね申すは氣違に候と申上られければ、權現様は三彌が持病又おこりたりと御笑ひなされ候。又或時幸若八九郎高館を舞ひけるを御上覽の節。武藏坊辨慶は世に勝れたる者なり。今の世は少かるべしと權現様上意ありけるを。三彌進み出で判官殿のやうなる主君ありかね申すべく候。辨慶は御座あるべく候と申されけり。曹源寺様(松平伊豫守綱政朝

臣の御時。御大名中御振廻の席にて。辨慶の事御物語に出でしに。辨慶はしき事と評判のありけるに。木下肥後守末席よりいや其辨慶少もほしく御座なく候。判官殿の料簡になり申し候へば。私の家來は残らず武藏坊や佐藤兄弟になり申すべく候。それ故何と判官殿になり申度と久しく心掛け申し候へども。まだ得なり申さず。口惜しく存じ候由いひ出だされしかば。曹源寺様聞しめし。唯今の肥前の理窟は拙者父新太郎が常申したる事にて候。能き旦那になり度と心掛け。いろく種々工夫し候へども。よき旦那になり候道合點致し申さず。書物を出だし學問仕候へば。よき旦那の道知れ申すべくと一心不亂に存じ極め。それより思案分別致し。古の聖賢の掟をけいこ致し。寐てもさめても忘れ申さず。少し旦那になり候道合點いたし候と拙者へ申聞候。日本國に響き渡り能く御存じの新太郎かくの如くいましめ申したる段と。今の道理と一つ事にて候

へば肥州は新太郎流と申すものにて候。此上の道理是あるまじく候とて御賞美ありけることぞ。

古の名將學問和歌を嗜まれし事

太田持資(後道灌と號す)上杉の家老なり。鷹野に出で、雨に逢ひ百姓の家に入りて簀をかし候へと云はれしよ。若き女ものは何とも云はずして山吹の花一枝折りて出だしければ花をくれよといふ事よてはなしとて腹立ちて歸られしに是を聞きし人のそれは。

七重八重花は咲けども山吹の實の一つだになきぞかなしきといへる古歌の心よて簀なきと申す事を言はで知らせ申したるなりと申しければ持資驚きて我はほどの事をさへ知らで百姓の娘に劣れる事口惜しとて其れより書をよみ歌に志をよせられけり。下總國へ軍を出だす時山涯の海邊より山上より石弓を張りたり潮

湛へたらば通り難かるべし如何といひし時折節夜半なるに持資いざ見て來らんとて馬を乗りいだしけるが其儘歸り潮は干たりとて軍を押し通されけり。これは。

遠くなり近くなるみの濱千鳥なく音に潮の満干を分しるとよめる歌あり。それを思ひ出して千鳥の聲遠く聞えたれば潮の干たるを知りたるとなり。又のき口に利根川を渡す時。是も夜半にてくらさはくらし。何こが淺瀬なるべきと口々にいひけるに持資。

そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあだ波はたてとよめる歌あり。波の荒き所を渡せと下知して難なく淺瀬を渡りけり。されば昔より武將は必學問に心をよせ歌の道をしり給ひけり。

本居宣長 「敷島の倭心を人間は、朝日に匂ふ山櫻花以て其風采思ふべく。日影の野山にかすみわたる如く、櫻の春風にはほひ満つる如く。

此復古の國學歌學を興隆して六十餘州に布き施らしめしは、宣長翁なり。さればこそ門人の數は四百九十人に及びしと云ふ。翁の伊勢の國松坂の人にて、幼名を小津宮之助と云ひしが、後本居姓に改め、通稱を彌四郎、健藏、中衛、春庵などいひ、母の遺言に依りて醫を業とせり。書齋に三十六の小鈴をかけて、心の懣せし時の之を振り鳴らして慰みたる故に、鈴屋の號あり。二十七の時契沖の著書を読みて古學の志を起し、後また眞淵の冠辭考を読みいよゝゝ意を決して其門人と爲る。實は寶曆十一年三十二の時なりき。

六十五の年より紀州侯に仕へ、奥醫師の列に加へらる。實は國學の師範として聘せられしなり。七十二の時京都に上り門人を集めて講筵を開きしに、中山大納言、三條大納言、園大納言、花山院右大將、日野一位、大炊御門中納言、綾小路中納言、芝山中納言、富小路三位等の方々その學風を敬慕して、或は四條烏丸の旅宿に來り、或は自邸に召しあはせしつゝ、古書の

講釋を聞かれしは、國學の隆盛またこゝに至りしを知るに足らん。

此年の九月二十九日松坂の自宅にて没せ、實に享和元年なりき。同所山室山に葬り、門人ども謚して秋津彦瑞櫻根大人と謂ふ。墓地は生前兼て自ら卜定し石を建て、今よりははかなき身とも嘆かじよ千代の住みかを定め得つればと彫りおきしといふ。

著述多き中も畢生の精力を注ぎしものは古事記傳なり、三十五にて稿を起し、六十九にて全部四十四卷の稿を脱せり。數百年來讀み解きがたかりし古事記を考證して、全く上古の訓法よかへし。世に此尊ぶべき上古史あるを知らしむるに至りしは、此傳の功ならずして何ぞ。

次に亂れはてたる文法を正さんとて文學界に大光明を興へたるものは詞の玉緒なり。明治の今日文法語格の教育社會に必用を知られつゝ、行はるゝもの多くは其起原をこゝと仰がざるは少なし。

其他音學語學の書は。

漢字三音考

字音假字用格

地名字音轉用例

あり。歌學の書には。

石上私叔言

玉篋

萬葉集玉小琴

古今集遠鏡

新古今集美濃家苞、草庵集玉篋

古今選

あり。神典古文の註釋には。

神代紀鬚華山蔭

大祓詞後釋

出雲國造神壽詞後釋

歷朝詔詞解

あり。物語の註には。

源氏物語玉小櫛

あり。考證には。

眞曆考

國號考

あり。論說辨難の書には。

取戎慨言

葛花

針狂人

天祖都城辨々

あり。初學を導くには。

初山踏

玉銖百首

神代正語

あり。隨筆には。

玉勝間

答問錄

あり。文章よは。

手枕

菅笠日記

鈴屋文集

あり。歌には。